

若梅に撫子

旧高松宮家と伝来の品々



若梅に撫子

— 旧高松宮家と伝来の品々



平成二十五年三月二十六日(火)～七月十五日(月・祝)

第1期…三月二十六日(火)～五月六日(月・祝)

第2期…五月十一日(土)～六月九日(日)

第3期…六月十五日(土)～七月十五日(月・祝)

宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3	—— ごあいさつ
4	—— 旧高松宮家における美術の継承
8	—— 【有栖川宮・高松宮略系図】
9	—— 図版・解説
97	—— 略御年譜
104	—— 主な参考文献
105	—— 出品目録
II	—— List of Exhibits
I	—— Foreword

凡例

- 一、本図録は、平成二十五年三月二十六日(火)から七月十五日(月・祝)までを会期とする展覧会「若梅に撫子——旧高松宮家と伝来の品々」の解説図録である。
- 一、本展覧会で展示する作品は、すべて三の丸尚蔵館の所蔵品である。
- 一、本図録に掲載する図版の作品番号は、展示番号と一致する。
- 一、会期中に展示替えを行う。
- 一、本図録に掲載した作品寸法の単位はcmである。特に記載のない限りは、縦(奥行)×横(幅)×高さの順で記した。
- 一、本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室研究員・岡本隆志が行い、同主任研究員・五味聖が補佐した。
- 一、本図録の図版解説は、岡本、五味のほか、主任研究員・太田彩、研究員・斉藤全人が分担執筆した。8頁の有栖川宮・高松宮略系図の作成は研究員・松谷美美が協力した。
- 一、本図録掲載の作品写真は、福島省、綿引雅俊(以上、株式会社インフォマージュ)他が撮影した当館所蔵のデジタル画像、フィルムを使用した。なお、宣仁親王殿下及び喜久子妃殿下のお写真は、当館所蔵のほか、公益財団法人高松宮妃癌研究基金、当庁総務課より提供を受けた。また、24、31、48頁の御沙汰書の写真は、当庁書陵部より提供を受けた。

ごあいさつ

高松宮家は、大正二年（一九一三）に創立された宮家です。高松宮宣仁親王殿下は、明治三十八年（一九〇五）一月三日、皇太子嘉仁親王（大正天皇）の第三皇男子としてご誕生になりました。そして、大正二年七月六日、有栖川宮威仁親王こっぎ薨去によって断絶となった有栖川宮家の祭祀を継承させるため、大正天皇より高松宮の宮号を賜り、わずか八歳で宮家の当主とられました。学習院、海軍兵学校へと進まれた殿下は、昭和五年（一九三〇）二月四日、徳川喜久子様とご結婚になり、同年、昭和天皇の御名代としてイギリス、スペインを公式訪問されたほか、欧米諸国を一年以上の期間にわたってご旅行になり、国際親善に努められました。ご帰国後は、わが国未曾有の困難な時期を迎える中で、海軍将校として各地へ派遣され多忙な日々を過ごされました。

戦後、宣仁親王殿下は国際親善、厚生、美術工芸、スポーツなど多彩な部門の団体の総裁に就任され、妃殿下とご一緒に記念式典や大会にご臨席になるなどして関係者を励まされ、各分野がそれぞれに発展してゆく様子を温かく見守られました。宣仁親王殿下は昭和六十二年二月三日、八十二歳で薨去されましたが、その後は妃殿下が宮家当主とられて、平成十六年十二月十八日に九十二歳で薨去されるまで、芸術文化の振興や社会福祉の拡充に寄与されました。

本展覧会では、当館が御遺贈を受けた品々の中から両殿下にゆかりの深い品々に加え、大正天皇、貞明皇后の御遺品や旧有栖川宮家から引き継がれた優品の数々を通して、両殿下と美術との深いつながりを紹介いたします。

平成二十五年三月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第62回 若梅に撫子-旧高松宮家と伝来の品々)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1-1	殿下御肖像	三木辰夫	一面	昭和31年(1956)	p. 14
1-2	殿下御頭像	ハンス・ヨルク・リンバック	一点	昭和31年(1956)	p. 14
1-3	妃殿下御肖像	ローズマリー・コイル	一面	1950年代	p. 18
1-4	妃殿下博多人形	西頭哲三郎(初代)	一点	昭和56年(1981)	p. 18
2	御命名書	明治天皇	二枚	明治38年(1905)	p. 20
3	犬張子		一對	明治38年(1905)	p. 21
4	檜兜		一点	明治38年(1905)	p. 22
5	天盃		一点	明治38年(1905)	p. 23
6	青漆塗御菓子文庫		一合	明治末期(20世紀初頭)	p. 23
7	示高松宮	大正天皇	一卷	大正2年頃(1913頃)	p. 24
8	殿下御染筆御扇子	宣仁親王殿下	一点	大正3年(1914)	p. 25
9	高松宮御成年奉祝詠進歌色紙帖		一帖	昭和11年(1936)	p. 27-28
10	大勲位菊花大綬章(殿下御佩用)		一組	大正14年(1925)	p. 29
11-1	ボンボニエール 丸形梅花散文		一点	大正14年(1925)	p. 26
11-2	ボンボニエール 箱形梅花散文		一点	大正14年(1925)	p. 26
12	ローブ・デコルテ		一点	昭和5年(1930)	p. 33
13	勲一等宝冠章(妃殿下御佩用)		一組	昭和5年(1930)	p. 32
14	黒地乱菊模様振袖		一点	昭和5年頃(1930頃)	p. 42-43
15-1	ボンボニエール 洲浜形松波文		一点	昭和5年(1930)	p. 35
15-2	ボンボニエール 櫃形		一点	昭和5年(1930)	p. 35
16	高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖		一帖	昭和12年(1937)	p. 36-37
17	御成婚記念メダル	大蔵省造幣局	一点	昭和5年(1930)	p. 39
18	スキーヤー形文鎮	朝倉文夫	一点	昭和5年(1930)	p. 38
19	納戸地虞美人草模様振袖		一点	昭和5年頃(1930頃)	p. 44-45
20	紫地牡丹に檜扇模様振袖		一点	昭和5年頃(1930頃)	p. 45
21	黒地梅に鳩模様振袖		一点	昭和5年頃(1930頃)	p. 46-47
22	象牙菊花蒔絵扇子		一点	昭和前期(20世紀前半)	p. 47
23	松に鶴図扇子		一点	昭和5年頃(1930頃)	p. 47
24	御旅行用御紋付象牙御化粧セット		一式	20世紀	p. 52
25	御旅行用御紋付鼈甲御化粧セット		一式	昭和5年頃(1930頃)	p. 52

26-1	ヴィクトリア大綬章（殿下御佩用）		一組	1930年	p. 53
26-2	レジョン・ドヌール大綬章（殿下御佩用）		一組	1930年	p. 53
27	大礼服トレーン		一点	1930年頃	p. 54-55
28	羽扇子		一点	1930年頃	p. 56
29	妃殿下御肖像	ヴァンダイク	一面	1930年	p. 55
30	薔薇模様ポレロ		一点	1930年頃	p. 56
31	ハンドバッグ	ガラード	一点	1930年頃	p. 57
32	白磁植物文花瓶	セーヴル国立製陶所	一点	1930年	p. 58-59
33	海洋生物文噴水電燈	セーヴル国立製陶所	一点	1930年	p. 59-60
34	ムラーノ・グラス花瓶	M.V.Mカッペリン工房	一点	1930年頃	p. 61
35-1	ボンボニエール 柄鏡箱形すみれ文		一点	昭和6年（1931）	p. 62
35-2	ボンボニエール 地球儀形		一点	昭和6年（1931）	p. 62
36	大三島図	松岡映丘	一面	昭和7年（1932）	p. 64
37	和歌懐紙	宣仁親王殿下	一幅	大正15年（1926）	p. 66
38	偉勳丕績	宣仁親王殿下	一幅	昭和4年（1929）	p. 66
39	和歌懐紙	喜久子妃殿下	一幅	昭和9年（1934）	p. 67
40-1	宮家御紋散蒔絵文箱		一合	昭和17年（1942）	p. 79
40-2	若梅撫子文蒔絵文箱		一合	昭和17年（1942）	p. 79
41	むつの御旅	中川紀元	一帖	昭和24年（1949）	p. 70-71
42	第十一回国体明石庭球大会	川西英	一面	昭和31年（1956）	p. 72
43-1	菖蒲	喜久子妃殿下	一面	昭和10年頃（1935頃）	p. 68-69
43-2	吹上御所にて	喜久子妃殿下	一面	昭和37年（1962）	p. 68-69
43-3	富士乃図	喜久子妃殿下	一幅	昭和45年（1970）	p. 68-69
44-1	三峰窯 志野風茶碗 銘 梅花	宣仁親王殿下	一点	昭和33年（1958）	p. 74
44-2	三峰窯 飴釉茶碗 銘 山里	宣仁親王殿下	一点	昭和38年（1963）	p. 74
44-3	三峰窯 瑠璃釉茶碗 銘 老松	宣仁親王殿下	一点	昭和40年（1965）	p. 75
44-4	三峰窯 伊羅保茶碗 銘 夏乃夜	宣仁親王殿下	一点	昭和49年（1974）	p. 75
44-5	三峰窯 白磁紅葉文花瓶	喜久子妃殿下	一点	昭和42年（1967）	p. 76
44-6	三峰窯 鉄絵灰釉雀置物	喜久子妃殿下	一点	昭和49年（1974）	p. 76
44-7	三峰窯 俎皿 銘 橋姫、江南	喜久子妃殿下	六点	昭和51年（1976）	p. 77
45-1	三峰窯 渦茶碗	加藤土師萌	一点	昭和26年（1951）	p. 78
45-2	三峰窯 鉄絵貝香合	加藤土師萌	一点	昭和38年（1963）	p. 78

45-3	三峰窯 瑠璃釉陶硯	加藤土師萌	一点	昭和40年(1965)	p. 78
46-1	ボンボニエール 菊花形双鶴若梅撫子文		一点	昭和30年(1955)	p. 80
46-2	ボンボニエール 丸形若梅に撫子文		一点	昭和55年(1980)	p. 80
47	修学院焼ふくべ形香炉		一点	江戸時代中期(18世紀前半)	p. 82
48	瓢形丁子風炉		一点	江戸後期(18~19世紀)	p. 83
49	歌蒔絵重硯箱		一具	江戸後期(18~19世紀)	p. 84
50	有栖川御流筆		十本	江戸末期~明治期 (19~20世紀初頭)	p. 86-87
51	色絵四季草花図食器	幹山伝七	一式のうち	明治前期(19世紀)	p. 88-89
52	有栖川宮家御紋付花盛器	クリストフル	一点	19世紀	p. 90
53	紅カットグラス洗面用器	ヴァル・サン・ ランペール	一式	20世紀	p. 91
54	色ガラス香水入	モーゼル	一式	20世紀	p. 91
55	雍熙帖	山名貫義ほか	一帖	明治33年(1900)	p. 92-93
56	鶏の図	川村清雄	一面	明治~大正期(20世紀)	p. 94
57	御紋付七宝鶏に秋草図花瓶	濤川惣助	一对	明治期(20世紀初頭)	p. 95
58	宝玉七宝鳳凰形香炉	梶佐太郎	一点	明治~大正期(20世紀)	p. 96
59	菊に鶴蒔絵提重		一組	大正6年頃(1917頃)	p. 85
60	藤花蒔絵提重		一組	大正7年頃(1918頃)	p. 85
61	赫夜姫昇天	野口光彦	一点	昭和28年(1953)	p. 96

旧高松宮家における美術の継承

平成十六年十二月十八日の高松宮喜久子妃殿下薨去に伴い、当館は平成十七年十月に旧高松宮家から美術工芸品類のご遺贈を受けた。ご遺贈品は、有栖川宮家に代々引き継がれてきた品々を含み、高松宮・有栖川宮の両宮家における美術の有り様を知る上で重要な意味を持つコレクションである。当館では、同コレクションの調査・整理を進め、これまでも高松宮同妃両殿下がお作りになつた三峰窯の作品や、宣仁親王殿下が大切になさり、来邸されたお客様にご披露したという江戸時代の根付《象墜》など、そのなかの一部を紹介してきた。本展では、これまでの作品調査をもとに、両殿下にゆかりの深い品々を中心に、旧高松宮家と芸術文化との関わりに焦点を当てることとした。本概説では、展示内容だけでは紹介できない部分も含め、両殿下が昭和から平成にかけてのが国の芸術文化に寄与された歴史的経緯をふりかえる（以下、本文中では旧高松宮家を高松宮家と表記する）。

有栖川宮家の文化的伝統

高松宮宣仁親王殿下は、明治三十八年（一九〇五）一月三日、皇太子嘉仁親王（大正天皇）の第三皇男子としてご誕生になつた。昭和天皇の弟宮として世間一般には知られているが、まずは高松宮家創立の背景についてふれておきたい。

大正二年（一九一三）七月六日、大正天皇は宣仁親王殿下に高松宮のご称号を賜り、有栖川宮家の祭祀継承を命じられた。このとき、殿下はまだ八歳であつた。その前日、結核を患われていた有栖川宮威仁親王が危篤に陥られたため、同月十日に威仁親王は薨去された。威仁親王は、明治三十二年に明治天皇より東宮輔導に任命され、皇太子時代の大正天皇のよき相談役であつたため、大正天皇の信任はことのほか篤かつた。威仁親王には後嗣裁仁王がおられたが、明治四十一年にわずか二十歳で夭折され、そのままでは宮家は廃絶となるはずであつた。しかし、伝統のある有栖川宮家が絶家となることを憂慮された大正天皇は、殿下に宮家の祭祀継承を託され、有栖川宮家初代好仁親王から三代幸仁

親王までが称されていた旧称号である「高松宮」を賜つた（有栖川宮家の略系図は八頁を参照）。その頃大正天皇は殿下のために《示高松宮》（作品番号7、二十四頁）を記されている。名家の誉れの高い宮家を継承することの意義を論しつつ、我が子の健やかなる成長への期待が込められた、七言律の荘重な漢詩である。

殿下は、威仁親王のご葬儀の喪主となられた後、大正十二年には熾仁親王妃の董子妃と威仁親王妃の慰子妃、お二方のご葬儀でも喪主となられた。有栖川宮家最後の皇族である慰子妃が薨去され、殿下は祭祀の継承だけでなく、有栖川宮家の文化的伝統も担われてゆくこととなる。有栖川宮家は和歌と書道を家学とし、文芸に秀でた宮家として知られる。書は、五代熾仁親王が父である霊元天皇から相伝して独自の書法を築かれて、有栖川御流を創始し、歴代の親王が受け継がれた。なかでも、八代熾仁親王は明治天皇の書道師範を務め、有栖川御流を大成させたことで名高い。宣仁親王殿下は成年式を迎えられた頃から、御歌所寄人の千葉胤明らに歌学や書の指導を受けられ、御染筆を遺されている（作品番号37、六十六頁）。和歌以外にも、昭和八年（一九三三）に日本美術協会に下賜された「延光閣」や、十三年に湊川神社のために揮毫された「湊川神社」の御染筆と同時期の御作が当館に伝わっている。なお、書道に関しては、後述するように喜久子妃殿下が有栖川御流を受け継がれた。文雅の道に優れた伝統をもつ有栖川宮家の業績を正確に後世に伝えるべく、殿下が命じて始められた一大事業が、大正十五年（一九二六）から昭和十五年にかけて刊行された有栖川宮家歴代当主の行実編纂事業であつた。行実とは、歴代親王の多岐に亘る事跡を、有栖川宮家から継承された高松宮文庫収蔵資料のほか、縁戚にあたる諸家の所蔵資料を幅広く渉猟して、親王一方ごとに編纂した一代記である。殿下はそれぞれの親王にふさわしい四文字を揮毫され、行実の巻頭に御染筆を寄せられた（作品番号38、六十六頁）。

殿下が有栖川宮家から引き継がれた美術品には、江戸時代まで遡るものから明治期のものなど、宮家の長い歴史を伝える貴重な作品が含まれている。本展で紹介する《修学院焼くくべ形香炉》（作品番号47、八十二頁）は、十八世紀前半、熾仁親王の父である霊元上皇の時代に修学院離宮のなかで焼かれた御庭焼で、

まさに有栖川宮家の歴史を伝える作品であろう。作品自体の素晴らしい出来もさることながら、修学院焼は伝存する作例が限られており、京焼の成立過程を調査する上で興味を持たれる逸品である。有栖川御流の筆は、江戸時代末期から明治期にかけて制作されたものであるため、前述した能書家の幟仁親王がお使いになった筆も含まれている可能性がある。今回の展示作品のなかには、喜久子妃殿下が御染筆のためにご使用になった筆もあり、有栖川御流の書風を表す道具として欠かすことのできないものである(作品番号50、八十六、八十七頁)。

また、近代の九代熾仁親王や十代威仁親王の時代に注文製作されたとみられる和洋の食器類も、明治期以降の宮家の晩餐の様子や食文化をたどる際に参考となる資料である。色絵による絵付けの見事な幹山伝七の《色絵四季草花図食器》(作品番号51、八十八頁)は、宮家でお持ちになっていた五百四十点すべて当館にご遺贈を受けたもので、これだけの点数がまとまって伝存している例はほかに知られていない。近代京焼の先駆けでありながら、これまで正当な評価がなされてこなかった幹山伝七の実像を考察する上で重要な作品群である。本展ではそのごく一部しか紹介できないが、機会を改めて全貌を紹介する予定である。

国際親善の一環として

さて、両殿下のご公務のなかで国際親善の占める割合は決して少なくなかったが、それでも美術が大きな機縁となっている。両殿下が海外の国々と関わりを持たれるようになるのは、昭和五年のご成婚後まもなく旅立たれたご外遊からである(ご外遊については四十八、四十九頁を参照)。ご外遊先で両殿下は名所旧跡のほか、多くの美術館を訪問され、各国の誇る芸術文化を堪能されると同時に、それらの国々の文化的な基盤がどのような特色を持っているのかを学ばれた。また、訪問先でご贈進を受けられた品々には、たとえば、当時最先端のアル・デコ様式のデザインで作られたセーヴル国立製陶所の花瓶と噴水電燈(作品番号32、33、五十八、六十頁)を献上したフランスのように、自国のセールスポイントとなりうる特徴のある品物が選ばれていた。一方、ご外遊先でお会いになった人々のなかには、松岡映丘、横山大観、藤田嗣治、小室翠雲、矢代幸雄ら、日本の著名な美術家たちがいた。藤田は制作活動のためにパリに滞在中であったが、映丘や大観はこの年ローマで開催された日本美術展の出品作家代表として、

翠雲と矢代は翌六年にベルリンで開催された日本美術展の役員として渡欧中であつた。両殿下がイタリアをご訪問になったときにはすでにローマ展は終了していたが、ベルリン展では両国の関係者の説明を受けられ会場をご覧になった。この二つの展覧会は日本画の大規模な海外展で、画家自身が参画している点においても当時としては画期的な企画であつた。このように、ご外遊を通じて見えてくるのは、それぞれの国の国柄を表す美術が主役となり、作品そのものが国際的な文化交流の実践的な道具として機能していたことである。

ご外遊後の殿下のご活動は、まさに美術を媒介として国際親善を図ってゆくという方向に向かわれた。なかでも国際的な文化事業を最も積極的に展開したが、昭和九年に殿下が総裁に就任されるとともに設立された国際文化振興会であつた。国際文化振興会は、わが国固有の文化の再認識及びその対外宣揚を目的として、設立当初は欧米の先進諸国を対象として活動していた。その後、国際情勢の変化により、同会は昭和十年代後半から南方方面へ主たる活動対象を移してゆく。(写真1)は、昭和十六年九月九日に、日本橋三越において国際文化振興会の主催で行われていた、仏印巡回現代日本画展覧会をご覧になる両殿下である。これは、当時の日本画及び版画の代表的な作家の新作をたずさえて、仏領インドシナ連邦

(写真1) 昭和16年9月9日 仏印巡回現代日本画展覧会をご覧になる
両殿下(於 日本橋三越)

の各地を巡回した展覧会
で、両殿下がご覧になったのは巡回前の日本展であつた。同展の二年後には、交換事業として日本で仏印現代美術展が開催されることとなった。これら戦前・戦中期の国際文化振興会の活動は、近代日本の国際文化交流の主要な施策として現在ふたたび脚光を浴びている(註1)。

この国際文化振興会

通じて殿下の知遇を得たとみられるのが、《殿下御肖像》(作品番号1-1、十四頁)を描いた三木辰夫である。三木は昭和三年に東京美術学校油画科を卒業後、ロンドンに留学してエッチングを学び帰国、戦前は第一美術協会会員として活動していた。前述した仏印巡回現代日本展覧会にも「Le Pont Nihon (日本橋)」と題した版画作品を出品しており(註2)、御肖像の額裏に貼られた自身の略歴にも、十六年に国際文化振興会の推薦により日本代表作家の一人として東洋各地で作品を展覧したと記していることから、同会と関係のある作家であることが明らかになった。また、同会との関係は不明であるが、昭和三十一年に在日スイス人有志から献上された《殿下御肖像》(作品番号1-2、十四頁)は、新進のスイス人彫刻家ハンス・ヨルク・リンバックによるものである。本作品には関係者の覚え書きが付属しており、制作経緯がよくわかる、ご遺贈品のなかでは珍しい作品である。それによれば、前年のあるパーティーの席で殿下のお姿を拝見したリンバックがその印象をもとに御頭像を制作したところ、殿下に直接ポーズをとっていたら修正する必要があるため、スペイン大使館の参事官を通じてその申し入れを行った。殿下はその願いを快く引き受けられ、二度に亘り同参事官邸でポーズをとられた。原型を完成させるとリンバックはスイスへ帰国し、ブロンズへの鑄造は日本人技師が行った。両殿下への完成作の献上は、スイス公使邸に両殿下が御成になり、有志代表によつて行われた。このほかにも、美術を通じた殿下と国際親善にまつわるエピソードは数多くあると思われるが、国際文化振興会を主として戦前から続けられた地道なご活動が、戦後日本の文化的復興を象徴するいくつもの外国美術展の名譽総裁就任へとつながつてゆくのである。

伝統と美術の庇護者

殿下が美術にも深い造詣をお持ちであったことは、先に見たご外遊の経験や、青年時代から当代一流の学者より講義を受けられて(註3)、幅広い知識を蓄えられたことが大きな要因になっているのはもちろんであるが、まず何よりも殿下ご自身が美術をお好きであったことが大事である。お好きであるがゆえに、ときには厳しいことをおっしゃり、高い目標を掲げられて関係者を叱咤激励されたのであろう。そして、殿下のご活動のなかに一本の芯が通つておられるよう



昭和2年4月6日 秩父宮殿下と共にフランス現代美術展覧会をご覧になる高松宮殿下(左から三人目、於 上野公園)

化の発信とその研究の双方に留意された。そこでお考えになったのが、有栖川宮家から相続された資財を元に設立された有栖川宮記念学術奨励金であった。これは専門的な研究に対して助成を行うもので、研究題目は日本もしくは東洋の文化に関すること、奨励金の授与は熾仁親王と威仁親王のご命日に当たる、年に二回とされた。大正十五年七月に第一回の授与が行われてから、昭和二十四年二月までに、のべ百五十人が奨励金を授けられた。

殿下はそのご生涯において、国際親善から厚生、スポーツ、芸術文化と多岐に亘る分野で総裁を務められたが、早くも昭和四年に就任されたのが日本美術協会の総裁であった(四十頁参照)。日本美術協会は明治十二年に発足した龍池会を前身とし、当代の日本美術の伝統保守を基本姿勢とする団体である。初代総裁有栖川宮熾仁親王を始めとして、歴代の総裁を皇族が務められ、殿下は第四代総裁に就任された。同協会は、明治期には会員の作家による新作展覧会を定期的に開催し、皇室のお買上げを受けるなど積極的な活動を行っていたが、戦争の激化に伴い昭和十八年に活動を中断した。殿下は戦後も引き続き総裁を務められ、現在は殿下のご意志を受けた高松宮殿下記念世界文化賞が創設されることとなり、芸術に関する国際的な表彰制度として注目を集めている。そのほかにも、日本漆工協会や日本美術刀剣保存協会の名譽総裁に就任されたが、伝統の継承という点で「伝統」という言葉の持つ意味を非常に重視してお

に感じられるのは、有栖川宮家の行実のところでもふれたように、過去から伝えられてきたものを正確に次の世代へと引き継いでいかれようという、伝統の継承に関してしっかりとしたお考えがおりだつたからなのではないだろうか。有栖川宮家が和歌や書道の実践を重んじられたのに対し、宣仁親王殿下は実践だけでなく、各分野に人脈を広げられてその奨励にもお心を配られた。特に近代の皇族として、わが国と海外諸国との友好関係を発展させるために、文

られたことがわかるのが、昭和三十三年に総裁に就任された日本工芸会の主催する日本伝統工芸展に関する、次のエピソードである。翌三十三年の第五回展にあたり、展覧会の名称から「伝統」の二文字を取り除くという問題が起こった。しかし、殿下はもし「伝統」の文字を削るのなら総裁をやめると発言され、結局、名称の変更はなくなった。これは、殿下が総裁就任を承諾されるにあたって条件とされた、「伝統工芸について正しい見解を、古いものの踏襲模倣ではなく、伝承された芸術技能を生かして、現代感覚のある創作に勤めて欲しい」とのお言葉にある通り^{註4}、伝統的な技術を軽視した創作では展覧会本来の設立趣旨を無視することにつながるためであった。ときに大胆なご発言をなさることもあったが、生活の近代化や経済の発展といった戦後日本社会の著しい進歩のなかで、殿下は最も取り残されやすい分野である美術の伝統の保存と継承を常に考えておられた。

喜久子妃殿下は、殿下のご活動を献身的に支えられたが、ご自身も芸術文化の保護育成にたずさわられた。いけばな諸流の大同団結をはかるためにいけばな芸術協会の名誉総裁に就任されたほか、殿下が大日本蚕糸会総裁を務められた関係から、わが国の伝統産業である絹織物の輸出振興に尽力された。昭和二十八年に政財界の要人に協力を依頼され絹の海外宣伝を行う「絹の道会」を設立し、旧高松宮邸であった光輪閣で在日外交団婦人を招待して絹製品のファッション・ショーを開催された。また、妃殿下は御母上の徳川實枝子様よりお教えを受けて、殿下とご結婚なさる前から有栖川御流の書をたしなまれた。御母上は有栖川宮威仁親王の第二女子であり、裁仁王の妹にあられる。そのため、徳川家に嫁がれて後、喜久子妃殿下に対しても有栖川御流の後継者としての教育をなさった。そうしたことから、御母上の希望もあって妃殿下は女子学習院時代も尾上柴舟による習字の授業は免除となり、代わりに浜八百彦から日本画を習われた。妃殿下は、昭和八年に御母上が亡くなられた後も、歴代の親王の書を手本に有栖川御流を独学されたという。日本画はその後も師にお就きになり、八木岡春山や前田青邨、児玉希望らの指導を受けられた(作品番号43、六十八、六十九頁)。当館にご遺贈を受けた御作のなかには、各地をご訪問になった際に地元の陶芸家と共作された器があり、そのいずれも妃殿下が書や絵を器の上に御揮毫になったものである。多くの人々が固唾を呑んで見守るなか、書き損じのできない土の上に鮮やかに揮毫なさった妃殿下の御作はお見事というほかない。

最後に、当館収蔵品以外の高松宮家ゆかりの文化財について紹介する。昭和六十二年九月、高松宮家から文化庁へ千八百三十点の文化財が寄贈された。寄贈当時の発表によれば、その内訳は鎌倉時代から江戸時代前期にかけての歌集等の写本類千六百五十九点、天皇や親王が着用された装束類九十八点、平安・鎌倉期を中心とした刀剣類七十三点であった^{註5}。それらの文化財は、国立歴史民俗博物館や京都国立博物館、東京国立博物館の所蔵となった。それ以外の有栖川宮家ゆかりの品は、幟仁親王が前身である皇典講究所の初代総裁を務められた國學院大學へ、宣仁親王殿下のご幼少時のお品は学ばれた学習院大学に寄贈された。また、喜久子妃殿下がご婚儀の際に徳川家から持参された雛人形は、徳川家にゆかりのある静岡県に寄贈された。そのほか、大阪青山学園や呉市海事歴史科学館大和ミュージアム、高野山金剛峯寺などへも高松宮家ゆかりの品々が寄贈されており、多くの人々に見てもらいたいという両殿下のご意志の通り、各施設において広く公開され現在にいたっている。近年では、これらの宮家が継承された文化財を特集した展覧会「宮廷の雅―有栖川宮家から高松宮家へ―」(平成二十三年、徳川美術館ほか)が開催され、大きな関心が寄せられたことは記憶に新しい。

岡本隆志(当館学芸室研究員)

註1 戦前・戦中期の国際文化振興会による芸術全般に関する事業の具体的な内容については、次の文献が詳しい。山本佐恵「国際文化振興会芸術事業一覽(一九三四―一九四五)」、五十殿利治「『帝国』と美術―一九三〇年代日本の対外美術戦略」、国書刊行会、平成二十二年。

註2 桑原規子「国際文化事業から対外文化工作へ―一九四一年の国際文化振興会主催『仏印巡回現代日本画展覧会』」、註1前掲書。

註3 日本美術史に関しては、東京帝国大学教授の瀧精一が御進講を行った。「宣仁親王略御年譜」から確認できる限り、瀧は大正十四年から昭和四年にかけて、合わせて四十九回の御進講を行った。

註4 公益社団法人日本工芸会のホームページ「日本伝統工芸展沿革・昭和32年(一九五七)より」。

註5 東京国立文化財研究所編『日本美術年鑑(昭和六十二・六十三年版)』大蔵省印刷局、平成元年。

図版・解説



高松宮宣仁親王殿下



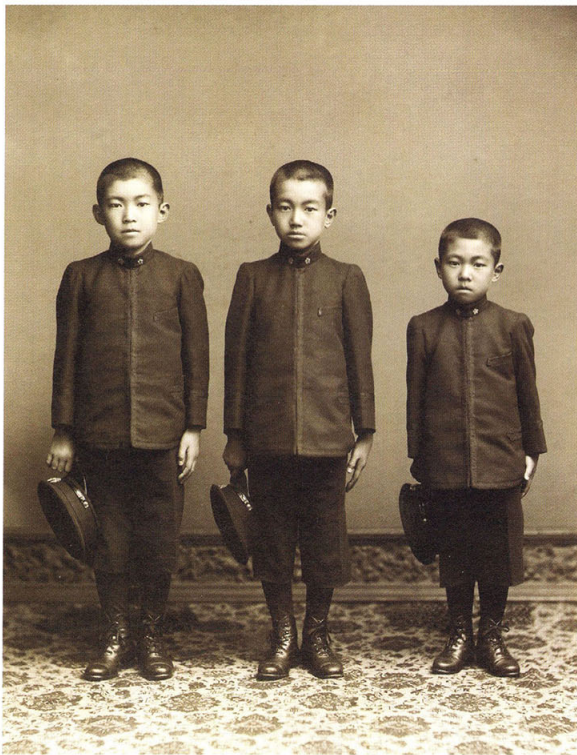
宣仁親王殿下は、明治三十八年（一九〇五）二月三日、皇太子嘉仁親王（大正天皇）、節子妃（貞明皇后）の第三皇男子としてご誕生になった。同年一月九日に命名の儀があり、御名を宣仁、ご称号を光宮と称せられた。明治四十二年四月、学習院幼稚園にご入園、同四十四年四月に学習院初等学科へご入学。大正二年（一九一三）七月六日、御年満八歳で高松宮の宮号を賜り、有栖川宮家の祭祀を継承された。大正九年三月、学習院中等科三学年ご修業、同年五月より江田島海軍兵学校にご入学。翌十四年一月十三日、成年式を迎えられ、同年十二月一日、海軍少尉にご任官、大勲位に叙せられ菊花大綬章を授けられた。以後、終戦まで海軍の任務につかれ、終戦時の階級は海軍大佐であった。昭和五年二月四日に徳川喜久子様とご婚儀を挙げられ、同年四月から翌年六月にかけて、昭和天皇の御名代として英国・スペイン両国への御差遣に伴い、妃殿下と共に欧米諸国をご訪問になった。

戦後は国際親善や厚生、文化、スポーツの発展に尽くされ、数々の団体や組織の総裁をお務めになった。各分野の関連行事にご臨席になるため、全国各地を精力的に訪れ、関係者を励まされた。昭和六十二年（一九八七）二月三日、八十二歳で薨去された。



明治39年6月 向かって右の迪宮殿下(昭和天皇)、左の淳宮殿下(秩父宮)と

明治40年9月28日 可愛い洋服を召されて



明治44年5月 迪宮殿下(昭和天皇)、淳宮殿下(秩父宮)と

明治42年6月 羽織・袴を着用された殿下(同年1月3日満4歳のお誕生日に初めて袴を召された。)



大正14年5月 貞明皇后と皇太子(昭和天皇)、秩父宮殿下、高松宮殿下



大正8年11月 淳宮殿下(秩父宮)と



昭和16年5月 海軍中佐の軍服を着用された殿下



昭和5年 通常礼装の殿下

昭和21年3月14日 アメリカ赤十字社の施設をご視察

昭和27年12月5日 神戸市立湊山小学校にて

昭和42年7月12日 カナダ・モントリオール万博日本館庭園
で在留邦人らとお会いになる

昭和33年4月15日 パリ市立近代美術館でガイヤール首相
とご歓談

1-1 殿下御肖像

三木辰夫 昭和31年(1956) 紙、インク、水彩 本紙24.8×19.5

三木辰夫(1904～87)はイギリスでエッチングを学び、昭和16年に殿下が総裁を務められた国際文化振興会の推薦により、日本代表作家の一人として仏領インドシナ連邦で作品展示を行った。ご肖像画は、同24年12月に写生、31年6月に完成したと作者本人が裏面に書き記している。大胆にデフォルメがほどこされた御頭像は、スイス出身の新進の彫刻家であったハンス・ヨルク・リンバック(1928～90)が制作し、在日スイス人有志より献上されたものである。

1-2 殿下御頭像

ハンス・ヨルク・リンバック 昭和31年(1956)
ブロンズ 35.8×32.2×38.2

高松宮妃喜久子殿下



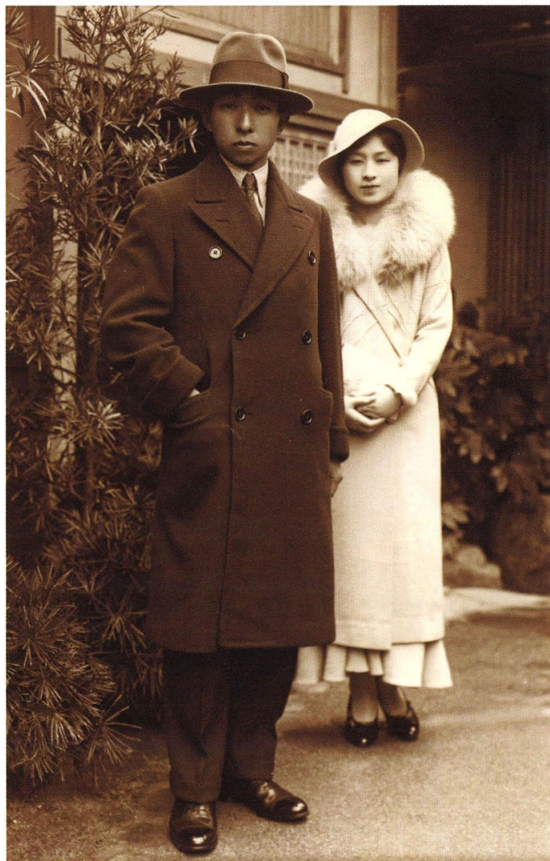
喜久子妃殿下は、明治四十四年（一九一）十二月二十六日に公爵徳川慶久の第二女子としてご誕生になった。慶久は徳川幕府最後の将軍として知られる徳川慶喜の第七男子であり、御母は有栖川宮威仁親王の第二女子、實枝子である。お名前は、祖父慶喜公の喜、父慶久公の久の字を採って、喜久子と命名された。大正五年（一九一六）四月、学習院幼稚園にご入園、同七年四月に女子学習院へご入学。昭和四年（一九二九）三月、女子学習院をご卒業。同五年二月四日、高松宮宣仁親王殿下とご成婚、勲一等宝冠章を授けられた。

戦後は幅広く様々な団体の総裁を務められ、藤楓協会や済生会、東京慈恵会等において社会福祉事業に熱心に取り組まれたほか、絹の道会や日本いけばな芸術協会、高松宮殿下記念世界文化賞等の文化事業を通じて国際親善にも貢献された。また、がん撲滅のためのご活動として、昭和四十三年に財団法人高松宮妃癌研究基金を設立、名誉総裁に就任され、がん研究を奨励された。平成十六年（二〇〇四）十二月十八日、九十二歳で薨去された。



大正7年頃 御母徳川實枝子様と

大正2年2月 御祖父慶喜公に抱かれる妃殿下



昭和9年2月 広島県呉市金谷別邸にて

昭和4年3月 女子学習院の卒業式を終えられて

昭和14年10月22日 秩父宮
邸にて貞明皇后の御晩餐の際
に(後列左から秩父宮殿下、高
松宮殿下、三笠宮殿下、前列
左から秩父宮妃殿下、貞明皇
后、高松宮妃殿下)



昭和25年2月 着物姿にて

昭和36年9月26日 第8回日本伝統工芸展をご覧になる両殿下

平成元年2月22日 おことばを述べられる妃殿下(高松宮妃癌
研究基金 平成元年度学術賞並びに研究助成金贈呈式に於て)

昭和46年8月18日 飛騨路ご旅行

1-4 妃殿下博多人形

西頭哲三郎(初代) 昭和56年(1981) 素焼、彩色
総17.8×17.8×43.7

1-3 妃殿下御肖像

ローズマリー・コイル 1950年代 カンヴァス、油彩
本紙73.8×42.0

華やかな菊文様の着物姿で金屏風の前面にお立ちになった妃殿下のご肖像画は、アイルランド出身の画家ローズマリー・コイル(1914～2004)の作品で、1950年代の制作と推測される。お人形は、福岡県無形文化財保持者である博多人形師の西頭哲三郎(初代：1921～96)の作で、鮮やかな赤の洋服にオレンジ色のお帽子を被られた華やかで若々しいお姿をとらえている。

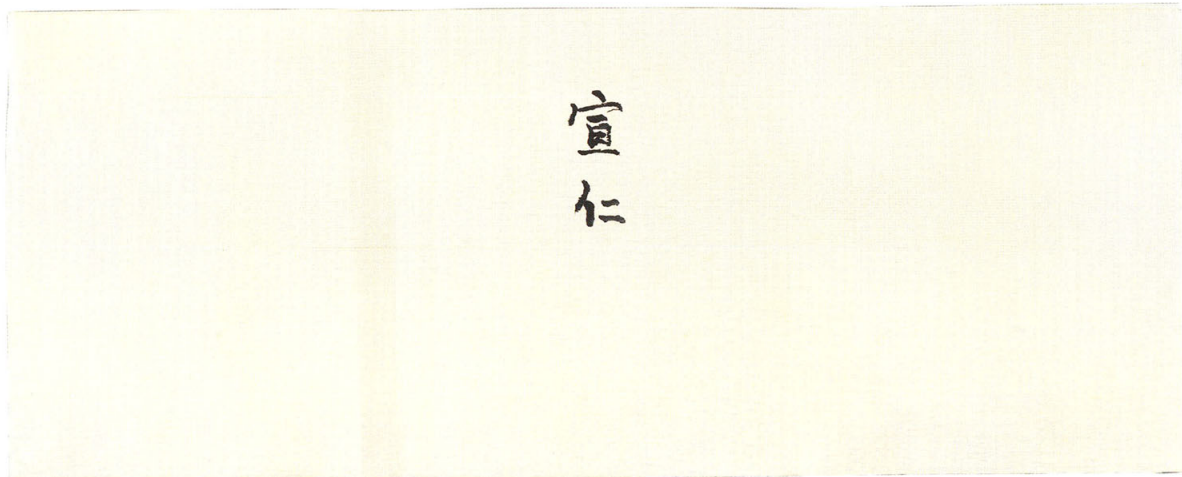
宣仁親王殿下
ご誕生からご成年まで



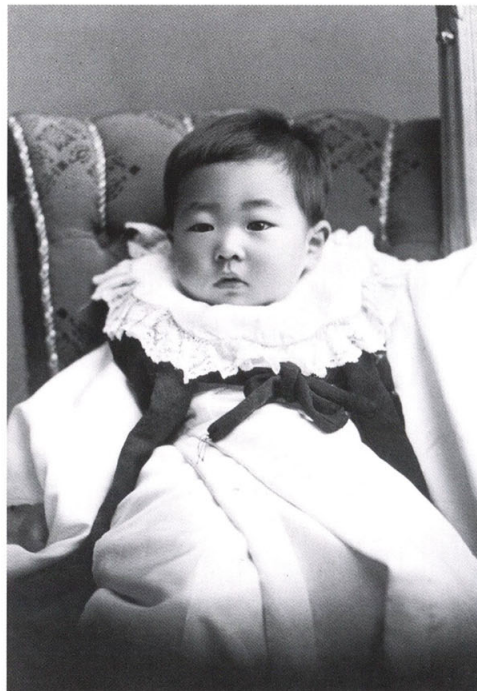
明治39年6月 1歳6ヶ月の頃



大正14年9月 20歳の頃



2 御命名書 明治天皇 明治38年(1905) 紙本墨書 各26.8×67.0



明治38年12月 満1才のお誕生日を前に

ご誕生から6日後の明治38年1月9日、命名の儀が行われた。殿下の御名「宣仁」、ご称号「光宮」は、御祖父である明治天皇が御命名になった。



3 犬張子 明治38年(1905) 紙胎、胡粉地、銀彩 (右) 18.0×31.5×20.8、(左) 18.7×30.8×21.0

犬張子は、古くより魔を祓うものとして一対で寝所に飾られ、婚礼や子供の誕生の折の贈り物に用いられてきた。本品は、殿下ご誕生ご記念の品として伝えられてきた犬張子で、お生まれになったばかりの殿下の枕元に置かれたものと考えられる。紙を重ねて張って犬の形を作り、表面に胡粉を塗って金や銀または彩色で装飾したもので、蓋と身に分かれ、容器となっている。表面に胡粉を塗り、銀泥で松竹梅や鶴亀の吉祥模様などが描かれ、犬の頭の頂には、胡粉の盛り上げで御紋が表されている。中には、髪やお顔を整えるための櫛や小筆を包んだ銀箔押の紙包が収められている。





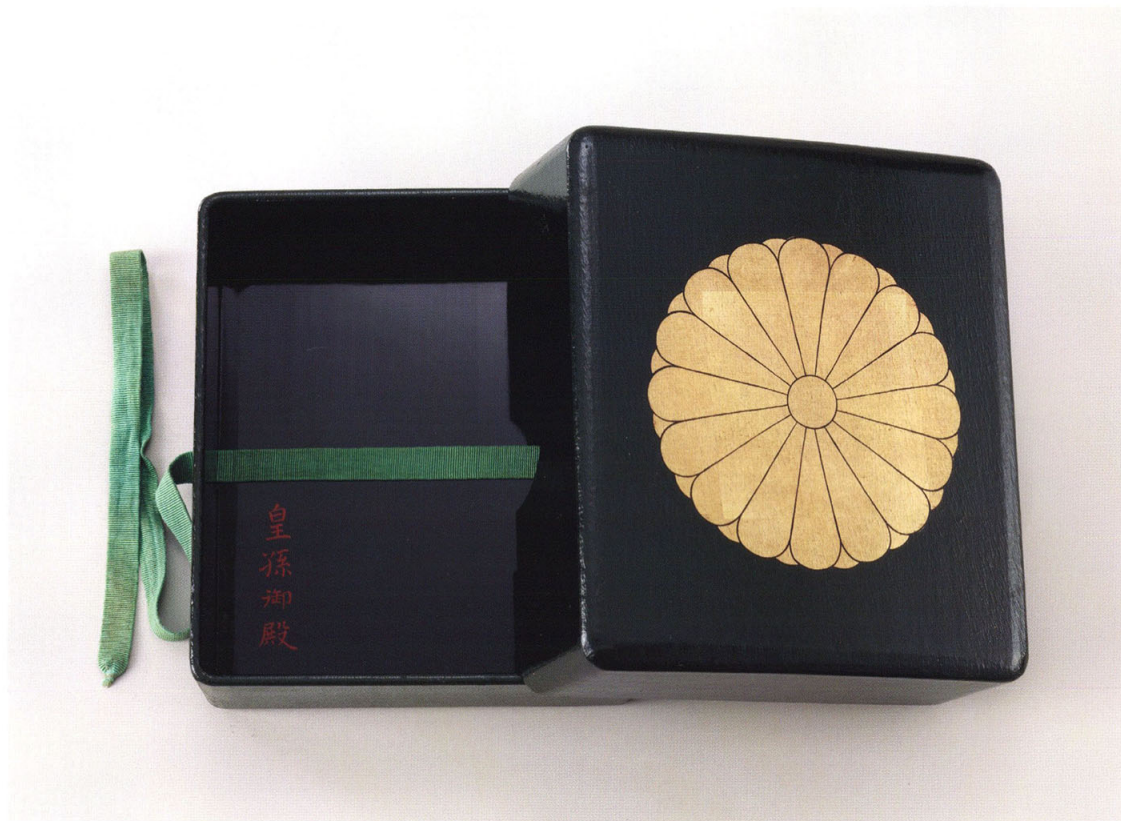
4 檜兜 明治38年(1905) 木製彩色 23.0×36.0×73.0

檜兜は宮中や公家に好まれた端午の節句の飾り物で、全体が檜の薄板で作られている。額には鍬形を飾り、顔には金箔押し出面頬を当て、後ろ側に鍔として、檜を細長く薄く削ったものを垂らし、鉢の頂に造花の菖蒲と蓬の葉を挿し立てるのが特徴である。宣仁親王殿下の初節句のお祝いは、明治38年6月7日に陰暦で催された。本品は、その2日後の9日に行われた箸初の儀の折に御父の皇太子(大正天皇)より殿下へ贈られた檜兜である。



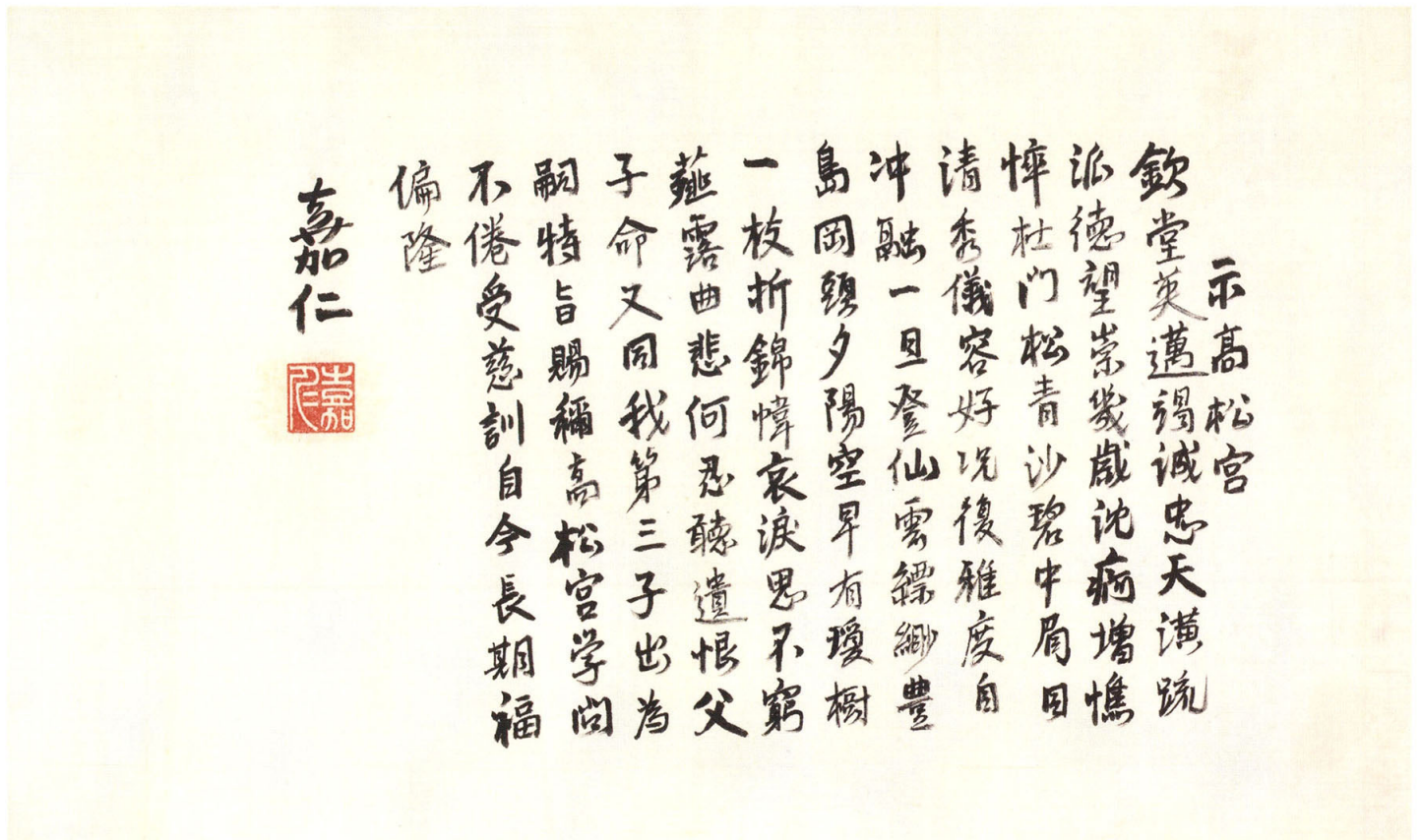
5 天盃 明治38年(1905) 陶磁 径12.5、高4.1

明治38年3月18日、宮中三殿に初参内された折の天盃で、昭和12年11月8日に貞明皇后より拝領されたもの。



6 青漆塗御菓子文庫 明治末期(20世紀初頭) 一閑張、漆塗 26.9×24.0×10.5

一閑張で造られた、御紋付き青漆塗りの文庫。外箱に「御菓子文庫」、文庫の内側に「皇孫御殿」と記されている。殿下がご幼少時、お兄様方とお過ごしになった青山御所内の皇孫御殿で、お菓子を保管されるのに使用されていたものと考えられる。



7 示高松宮 大正天皇 大正2年(1913)頃 絹本墨書 本紙37.2×62.1

大正天皇は、第三皇男子の宣仁親王殿下が有栖川宮家の祭祀を継承する御沙汰を宣下され、殿下に高松宮の称号を賜った。天皇はまだご幼少の殿下に対して、祭祀継承の所以を教え、学業と幸福の増進を祈る漢詩を贈り示された。

(参考図版)

大正2年、高松宮の称号を賜る御沙汰書 [当庁書陵部蔵]



8 殿下御染筆御扇子 宣仁親王殿下 大正3年(1914) 木製、紙本墨書 骨長27.7

9歳の時、お詠みになった和歌を絵と共に扇面に御染筆になった。



大正4年10月 学習院初等科5年生の殿下



大正15年6月 成年式を終えられて成人のご装束で



大正14年1月 成年式を迎えられて

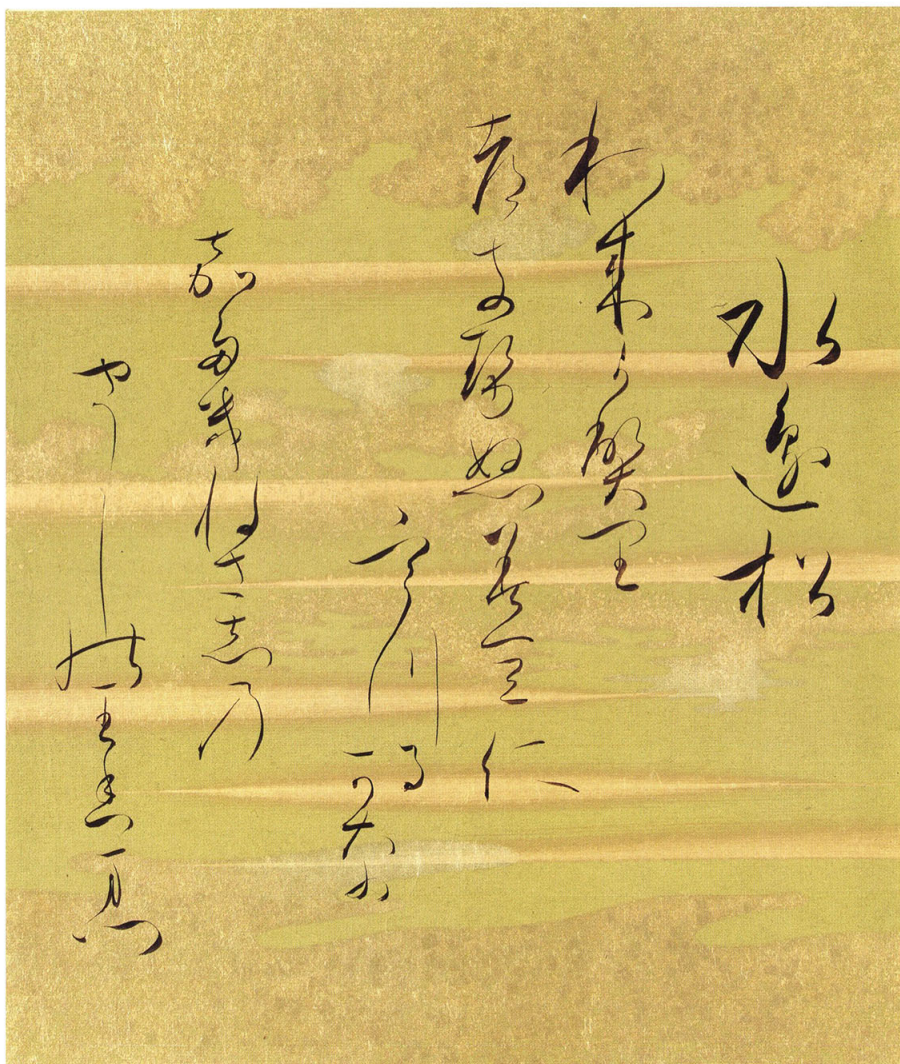


11-2 ボンボニエール 箱形梅花散文
大正14年(1925) 銀製 5.2×3.9×2.0



11-1 ボンボニエール 丸形梅花散文
大正14年(1925) 銀製 径6.40、高2.60

ご成年のお祝いの席で出席者に配られた、お菓子を入れた銀製の小箱。このような小箱は、明治中頃より皇室やその周辺での饗宴の折に記念の品として配られてきたもので、その都度、様々に意匠を凝らしたものが作られた。次第にボンボニエールと呼び慣わされて、皇室ご慶事ゆかりの品として現在もその伝統が引き継がれている。作品番号11-1は蓋表に高松宮家の御紋と殿下のお印にちなんだ梅花が散らされている。成年式当日に高松宮邸で行われたご内宴の折のもの。作品番号11-2は成年式後に数日にわたり宮殿で行われた、関係者を招いての饗宴で配られたものと考えられ、蓋表中央に御紋を置き、霞に梅花を散らした意匠となっている。



貞明皇后

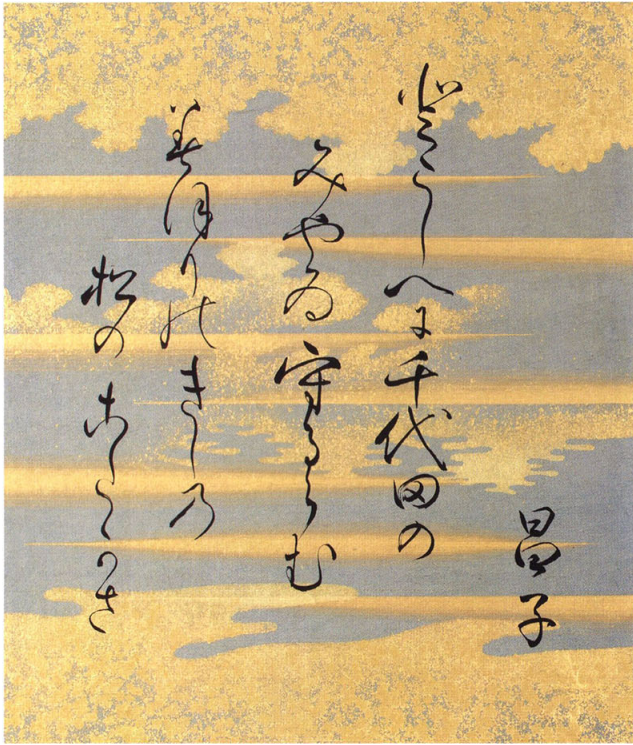
9 高松宮御成年奉祝詠進歌色紙帖

昭和11年(1936) 紙本墨書
本紙各21.1×18.0

元皇子伝育官長・松浦寅三郎が記す本帖末の跋文によれば、「海軍兵学校をご卒業の翌年、御成年式を迎えられた宣仁親王殿下の盛典に対し、御歌所では「水辺松」という御題をもって詠進を發起、百首余の寿ぎの歌が集まった。さらに、これをお聞きになった貞明皇后からも御歌を賜い、また他の皇族方の歌も加わることになり、宮家ではこれらを一つの帖にまとめて長く伝えることとした」と記される。詠進歌は大正14年2月にまとめられたが、本帖は昭和11年11月に仕立てられ、119首が収められている。

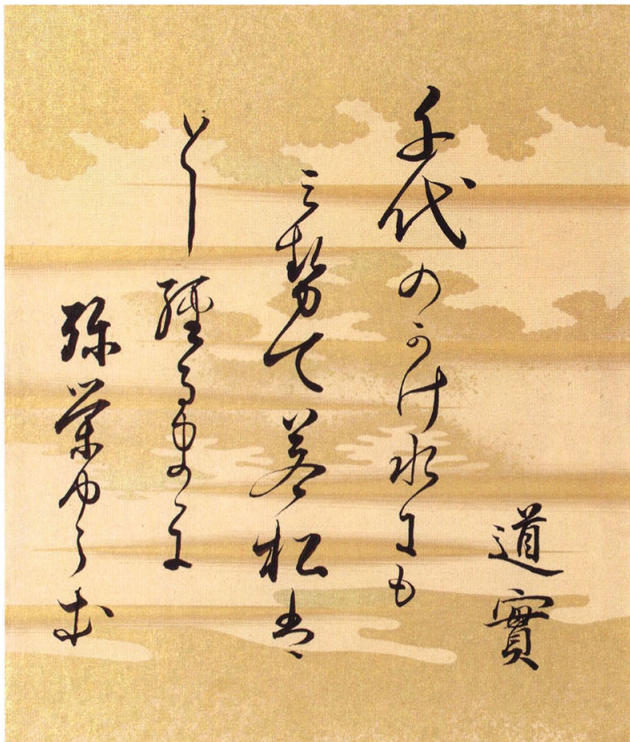


表紙



竹田宮昌子妃

北白川宮房子妃



九条道實

梨本宮伊都子妃



大正15年6月 海軍少尉の正装に大勲位菊花大綬章を佩用された殿下

大正14年1月13日に成年式を終えられた殿下は、同年12月1日に海軍少尉に任官されると共に大勲位に叙せられ、菊花大綬章を授けられた。



10 大勲位菊花大綬章(殿下御佩用)
大正14年(1925)

ご成婚とご外遊



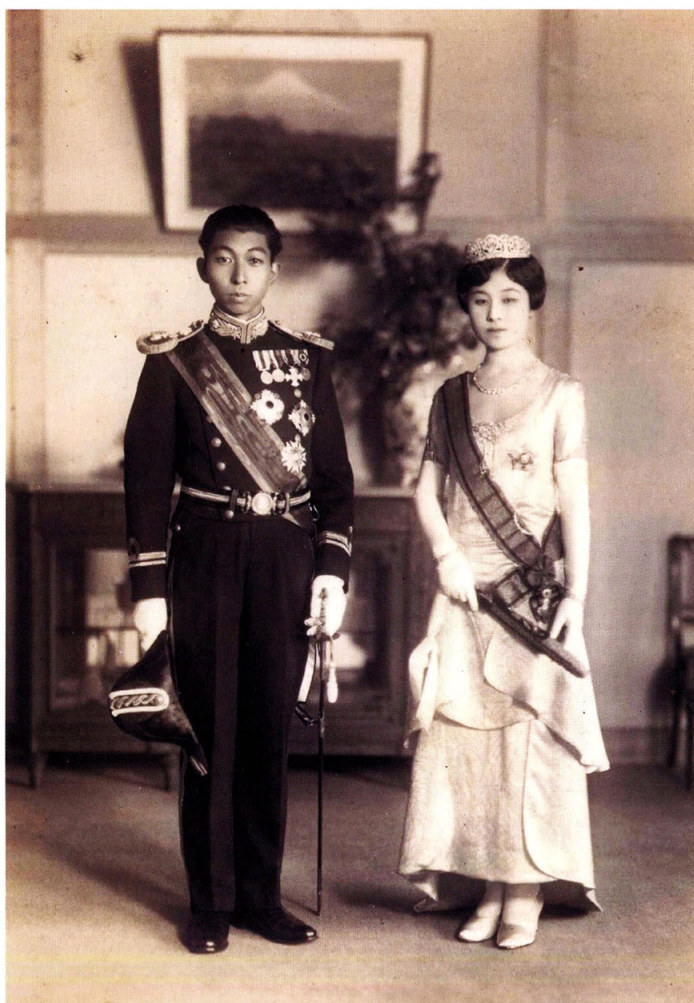
昭和5年6月27日 儀装馬車でロンドン市長官邸に向かわれる



昭和5年2月4日 ご婚儀当日の両殿下

昭和4年4月12日、故徳川慶久公爵の第2女子、徳川喜久子様とのご結婚が、昭和天皇より聴許された。翌5年2月4日午前、両殿下は、賢所にて結婚の儀を挙げられた。殿下は東帯、妃殿下は五衣・唐衣・裳のご装束をお召しになった。

(参考図版)
結婚聴許の勅書 [当庁書陵部蔵]



昭和5年2月4日 朝見の儀を前に(高輪仮御殿にて)

昭和5年2月4日、賢所における結婚の儀を終えて高輪仮御殿に戻られた両殿下は、供膳の儀をお済ませになると洋装に改められた。同日午後、再び参内し朝見の儀に臨まれた。お写真はそのときのご洋装の姿を写したもので、殿下は海軍中尉のご正装、妃殿下はローブ・デコルテをお召しになり、勲一等宝冠章を佩用されている。



13 勲一等宝冠章(妃殿下御佩用)
昭和5年(1930)



12 ローブ・デコルテ (朝見の儀に際して召された御服)
昭和5年(1930) 象牙色織地、ビーズ装飾 肩巾34.0、総丈177.0



儀式や行事の折に着用する女子の礼服は、明治期に和装から洋装に改められ、明治19年には大礼服、中礼服、小礼服、通常礼服の区分に服制が定められた。ローブ・デコルテはこの中礼服に当たる礼服である。襟あきが大きく、袖無しあるいは短い袖の裾長のドレスとされた。妃殿下が朝見の儀にお召しになったローブ・デコルテは、象牙色地に銀糸で八重菊をアレンジした花模様を表したもの。胸元を広く見せ、短い袖にはビーズ装飾が施されている。当時の西欧の流行を反映して、ローウエストに足が見えるスカート丈で引き裾も短く、明治期のものにくらべて軽快なものとなっている。スカート部分は裂を斜めに使ったパーツを対称に組み合わせており、柔らかな曲線でまとめられたシンプルなデザインである。



昭和5年1月22日 御母様と御父慶久公、御祖父慶喜公の墓参をされる



昭和5年1月17日 納采の儀の日の妃殿下



昭和5年2月4日 ご婚儀当日、小石川第六天町の徳川邸を出られる妃殿下



昭和5年2月4日 両殿下を乗せた馬車列



昭和5年2月18日 赤坂離宮におけるご成婚披露宴の折に

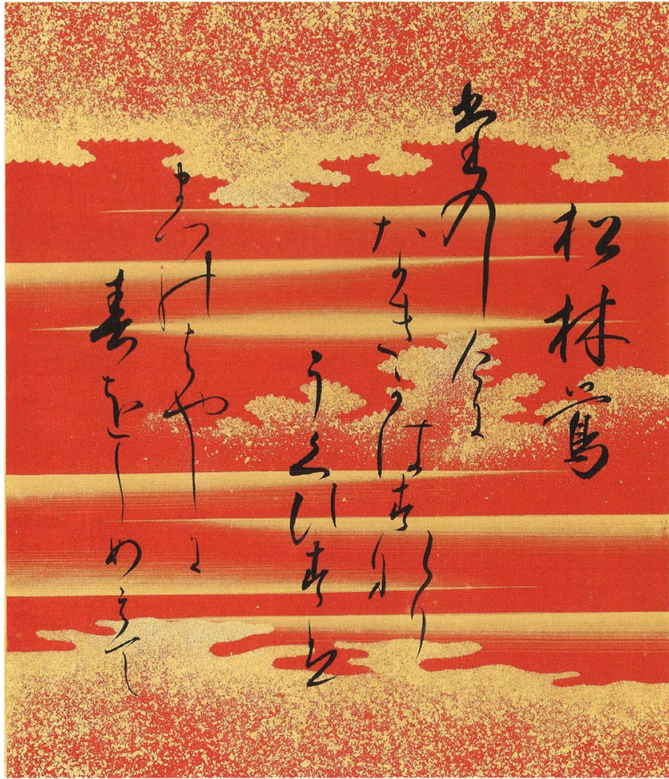


15-2 ポンボニエール 櫃形
昭和5年(1930) 6.45×6.25×3.9

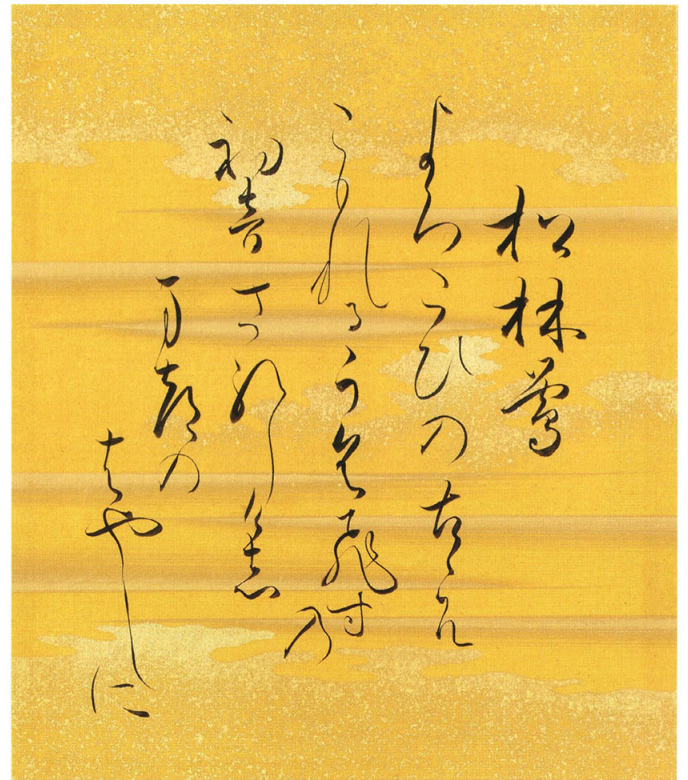


15-1 ポンボニエール 洲浜形松波文
昭和5年(1930) 3.95×6.2×1.8

作品番号15-1は、高松宮家の御紋を付けた、洲浜形の被せ蓋のボンボニエール。2月18日から20日までの連日、赤坂離宮での関係者をお招きしての披露宴でご使用になったもの。底裏に「昭和五季春」の刻銘がある。作品番号15-2は、同月26日に華族会館で催された、お里開きの宴席のもの。櫃形で蓋表には波に月の図様が、蓋裏には妃殿下のご実家、徳川家の葵紋が彫られている。



香淳皇后



貞明皇后



表紙

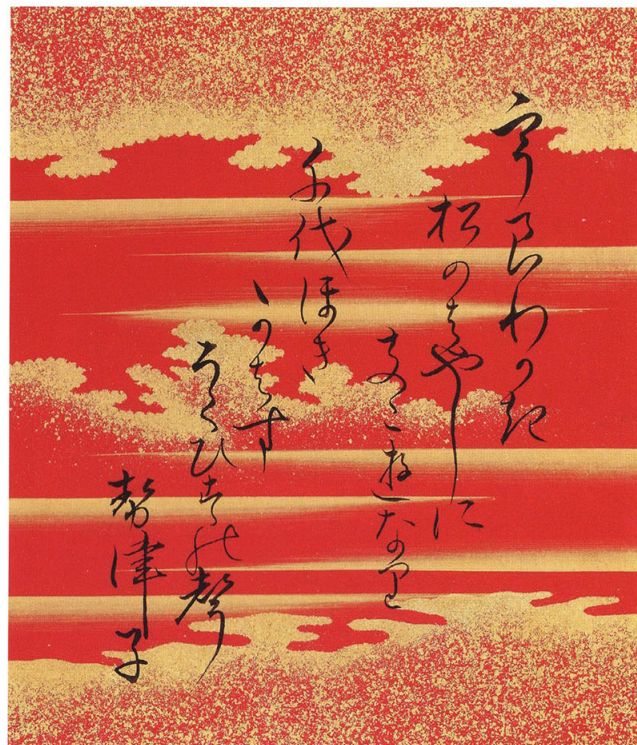
16 高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖

昭和12年(1937) 紙本墨書 本紙各21.1×18.0

宣仁親王殿下御成年に際しての奉祝歌と同様、ご成婚に際しても「松林鶯」という御題により、和歌が詠進された。跋文によれば、詠進歌は数百首を超えたようであるが、本帖には、皇后(香淳皇后)、皇太后(貞明皇后)の御歌を賜り、全120首が収められる。和歌はいずれも、宮号にある「松」を意識して、常盤なる松、美しい鶯の声とその喜びを歌に込め、宮家の繁栄を寿ぐ。跋文は昭和12年春、元高松宮附別当・石川岩吉によって記されており、本帖が仕立てられた時期を示している。



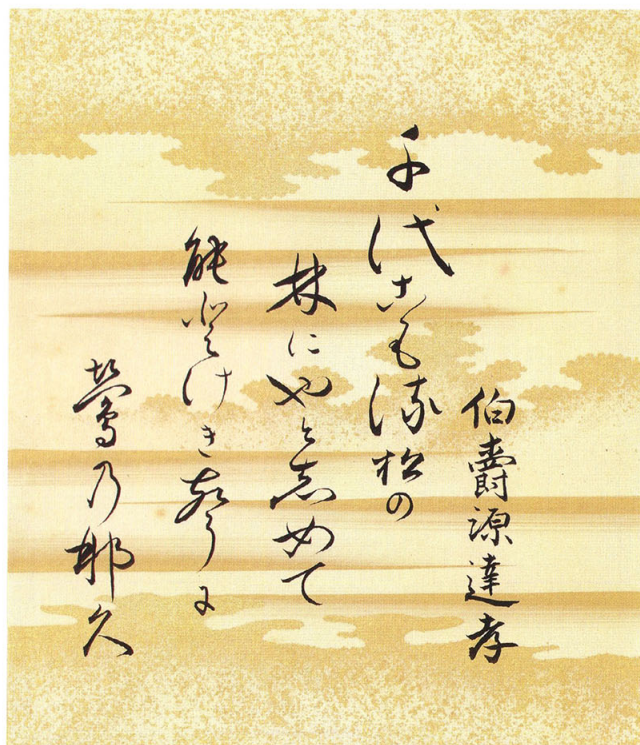
徳川實枝子



秋父宮勢津子妃



入江為守



徳川達孝



18 スキーヤー形文鎮
朝倉文夫 昭和5年(1930) 白銅、鑄造 10.5×45.0×16.0

わが国における草創期からスキーをなさった殿下は、「スキーの宮様」としても国民から親しまれた。戦前から続く「宮様スキー大会」など数々の大会に臨席され、スキー競技の振興に寄与された。朝倉文夫(1883～1964)による、このモダンなスキーヤー形の文鎮は、殿下のご成婚を祝して六華倶楽部から献上された。六華倶楽部とは、秩父宮雍仁親王を中心に皇族や華族が結成した会員制のスキークラブで、日本初の民間スキー場が作られた山形県板谷の五色温泉には、かつて同名の専用スキーロッジがあった。

大正13年12月29日 山形県五色温泉スキー場にて

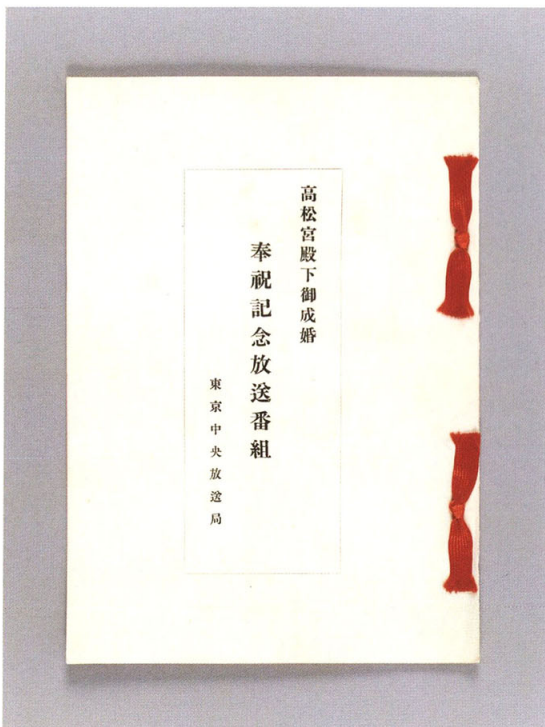


17 御成婚記念メダル

裏

大蔵省造幣局 昭和5年(1930) 白銅、鑄造 径6.0

両殿下のご成婚を祝して、大蔵省造幣局で作られた記念メダル。表には「高松宮御成婚記念」の文字と松に番の鶴、裏には海原の上を飛ぶ二尾のトビウオ、その背景には海軍中尉であった殿下にちなみ艦船が表され、「昭和五年二月 造幣局製」の文字が刻印されている。



(参考図版)

東京中央放送局「高松宮殿下御成婚奉祝記念放送番組」目録

両殿下のご成婚を記念して、日本放送協会 (NHK) の前身である東京中央放送局が、ご成婚当日の2月4日から6日にかけて放送した記念番組の目録。記念講演のほか、「江戸時代より昭和時代まで」と題して謡曲から始まりヴァイオリン独奏で終了する、和洋の楽曲演奏が三夜連続で放送された。

〈参考作品〉



地③ 荒木十畝 鳳凰



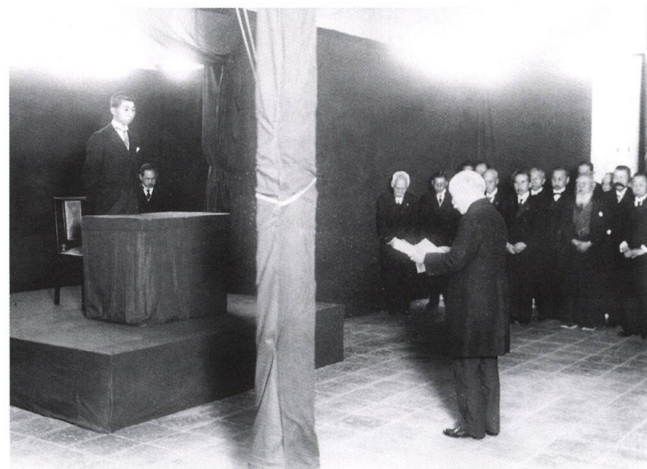
天④ 梅花書屋 小室翠雲

御婚儀奉祝画帖(天・地)

日本美術協会 昭和5年(1930) 絹本着色 本紙28.5~29.3×35.1~36.7

昭和5年に両殿下の御成婚を祝って日本美術協会より献上された画帖。天・地の二冊組で、それぞれ冒頭の題字の他に、天冊には15名、地冊には14名の画家が筆を寄せている。川合玉堂、小堀鞆音といった明治期から活躍し続け、昭和期には画壇の大家となっていた画家たちが、こぞって吉祥的な画題に取り組んでいる。

宣仁親王殿下は、昭和4年より同協会の総裁に就任され、以来昭和62年に薨去されるまでの58年間にわたり、長くその職を務められた。昭和63年より同協会は殿下のご遺志に基づき、高松宮殿下記念世界文化賞を設け、いまでも世界各国の功績のある芸術家に毎年授与している。



昭和4年4月30日 日本美術協会総裁推戴式の様子



地⑨ 牡丹 村上委山



天⑮ 富嶽 八木岡春山



天③ 早春 川合玉堂



地⑩ 竹林山水 岡田蘇水



天⑯ 寿老 狩野探令



天⑤ 嘉辰令月 高取稚成



地⑫ 高砂 森村亘福



地② 萬歳榮 小堀鞆音



天⑦ 花見 島崎柳塙



地⑬ 競馬 大坪正義



地⑤ 鶴 池上秀畝



天⑧ 天平風俗 津端道彦



地⑮ 双亀 森脇雲溪



地⑧ 天保九如 佐竹永陵



天⑭ 不老長春 佐藤紫煙





昭和5年2月17日 貞明皇后ご主催のご内宴の折に

14 黒地乱菊模様振袖

昭和5年(1930)頃 縮緬地、友禅染、刺繍
 裾62.5、身丈160.7

妃殿下がご成婚後のご内宴でお召しになった振袖。黒地で高松宮家の御紋を五つ紋に入れる。裕仕立てで、裏も同裂で表と同じ裾模様がある。全体に薄綿を入れ、袖と背には紅色の裏地を付けている。縮緬地に乱菊の模様を友禅染で表し、花卉の先や花芯などに刺繍を施している。



前面





20 紫地牡丹に檜扇模様振袖

昭和5年(1930)頃 縮緬地、友禅染、刺繍
 裾63.0、身丈160.0

牡丹の花を中心に、菊や藤の花、蝶を取り合わせ、各所に檜扇を配した模様の振袖。友禅染で、やはり花卉の一部に刺繍がある。ご成婚前にご準備された着物の数々の一つである。

19 納戸地虞美人草模様振袖

昭和5年(1930)頃 縮緬地、友禅染、刺繍
 裾64.0、身丈162.8

納戸色と呼ばれる、少しくすんだ縹地に伸びやかに虞美人草を中心に凌霄花や菊、撫子、立葵など、夏から初秋にかけての花々と、背側の裾につがいの錦鶏鳥を表した振袖。宮家の御紋を五つ紋に入れ、衿仕立てで全体に薄綿を入れている。模様は友禅染で表され、花芯など一部に刺繍がある。昭和5年の外国ご訪問の折にお持ちになったもの、との伝来がある。





22 象牙菊花蒔絵扇子 昭和前期(20世紀前半) 象牙、蒔絵 骨長26.0



23 松に鶴図扇子

昭和5年(1930)頃 象牙、蒔絵、絹本着色 骨長24.5

これらの扇子は、重要な祝賀行事の折に妃殿下がお手元にお持ちになったもので、ご正装にふさわしい装飾が施されている。作品番号22は、象牙の薄板を繋いだもので、表裏とも菊花に雀の図様を蒔絵で表している。一番外側の親骨にも同様の蒔絵があり、御紋が付けられている。妃殿下が香淳皇后より拝領されたもので、その年代は不明ながら、ご成婚の頃かと考えられる。勲章を佩用する祝賀、また四大節などにご使用になったことが箱書きに示されている。作品番号23は昭和5年2月のご婚儀を前に、貞明皇后より妃殿下が拝領されたもの。骨は象牙で親骨には蒔絵で御紋と松樹に鶴の図が表されている。扇面の表は旭日と松樹に巢籠もりの鶴、裏は竹に雀が描かれる。勲章を佩用しないお祝いの席でご使用になったものである。

21 黒地梅に鳩模様振袖

昭和5年(1930)頃 縮緬地、友禅染、刺繍 桁62.5、身丈160.2

満開の梅花の樹に、17羽の白鳩を取り合わせた振袖で、下方には流水が配されている。友禅染で、鳩の羽や花芯に刺繍がある。白い鳩を新しい吉祥模様として女性の着物に積極的に採り入れるようになったのは、大正から昭和初期にかけてのことと考えられる。第一次世界大戦後に日本が国際社会に積極的に関わる中で、鳩は平和の象徴、とする西洋の考え方が国内に定着したことがその背景にあらう。

昭和五、六年の高松宮同妃両殿下のご外遊

昭和五年二月四日にご婚儀を挙げられた高松宮同妃両殿下は、同年四月二十二日から翌年六月十一日までの約十四ヶ月間、延べ日数にして四百十七日間におよぶ、長期のご外遊に出発された。ご訪問先はヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国であったが、この旅行は単に蜜月をお過ごしになるための新婚旅行ではなかった。前年五月にグロスター公が来日して、昭和天皇に英国王ジョージ五世よりガーター勲章を贈られたことに対するご答礼と、スペイン国王へ菊花章頸飾をご贈進になるよう、御名代としての御差遣があつたのである。

ご外遊の行程は次ページの略表の通りである。ご帰国後、関係者が資料を集めてまとめあげた『高松宮同妃両殿下御外遊日誌』（高松宮家蔵版、昭和十年）には、全日程の記録が収められており、私たちは若いお二人のご活躍ぶりを知ることができ、このご旅行は、後々まで両殿下にとつて大切な思い出となり、これまでも妃殿下の回顧談や一般書でも披露されてきた。本展でも宮家ゆかりの品々を通じて、ご外遊の一端を紹介することとしたい。

公式訪問された英国では、ロンドン市民の大歓迎のなか鹵簿でバッキンガム宮殿に向かわれた。翌日の現地新聞は、はるばる遠い日本から来訪された若きプリンスとプリンセスの堂々としていてじつに自然なお振る舞いに人々が感銘を受け、特に道中における妃殿下の微笑が印象的であつたと報じた。そのような妃殿下のお姿をとらえた王室御用達の写真家ヴァンダイクが制作した御肖像（作品番号29）は、重厚な肖像画

英国、スペイン国へ御差遣の御沙汰書 [当庁書陵部蔵]



鹿島丸のデッキで随員一同と

を伝統とする英国らしい作品である。英国王室の丁重な接遇に対して、殿下は答礼使の大役を果たされ、殿下は国王ジョージ五世より《ヴィクトリア大綬章》（作品番号26）を、ご拝領、両国の友誼をさらに深められた。妃殿下はマリー王妃より《ハンドバッグ》（作品番号31）を受領され、記念の品として大切にお持ちになっていた。

英国の次に訪れたフランスでは、第一次世界大戦の激戦地であつたヴェルダンを始め同国の戦跡を視察されている。ヴェルダンは、まだ皇太子であつた昭和天皇が大正十年のご渡欧時にお立ち寄りになった地であつた。また、フランスではセーヴル国立製陶所を訪れた。五年前にパリで開催された万国裝飾美術博覧会に、同国が威信をかけて発表したアール・デコ様式が全盛を迎えた時代であり、フランス政府が製作を依頼して贈呈された花瓶と噴水電燈器（作品番号32、33）も、まさにその典型的な作例である。その他にフランスでは、ファッション写真や芸術家たちの肖像写真を数多く撮影したアンリ・マニエルの写真館でご撮影を行っており、洗練されたドレス姿のお写真（50頁）が残されている。

その後にお立ち寄りになったイタリアのムラーノ島は、古くからガラス工芸で知られている。本展で出品する花瓶（作品番号34）は、底部の製作者のラベルから、その折の品と考えられるものである。カッペリン工房は活動期間が短かつたため、現存作品はアール・デコ期に集中しているが、この花瓶は独特の柔らかさが感じられる形状で面白い。

長いご外遊の間、両殿下は各国で名所旧跡だけでなく、様々な美術館や博物館をご覧になつている。当時の日本人はおそらく、それだけ多数の場所を訪れた人はおそらくいなかったであろう。また、『御外遊日誌』には、鹿島丸に同船した岡田三郎助を始め、松岡映丘や藤田嗣治、横山大観、矢代幸雄など、同時期に欧州を訪れていた美術家の名前が登場する。両殿下は彼らと現地でお会いになつて、芸術談義にも花を咲かせていたようだ。この期間における「実地学習」の成果は、お二人のその後のご生涯における美術との関わり方に大きな影響をお与えになつたのではないかと思われる。

両殿下ご外遊——グランド・ハネムーンの道のり

●昭和5年(一九三〇)

4月21日	鹿島丸にて横浜港を「出発」。
4月28日	上海着。
5月1日	香港着。
5月8日	シンガポール着。
5月15日	コロンボ着。
5月22日	アデン着。
5月27日	前日にスエズ通過、カイロ着。カイロ、ギゼー「見物」【エジプト国「訪問」】
5月31日	ナポリ着。国立博物館、ポツツオリ、ソルファタラ等「ご覧」。
6月2日	マルセイユ着。5日、大統領を「訪問」。7日、マニユエル兄弟写真館にて「撮影」【フランス国「訪問」】*《両殿下御肖像》(50頁)
6月8日	ジュネーブ着。各地を「旅行」【スイス国「訪問」】
6月21日	パリ着。英国「訪問」のための御服の準備をされる。
6月26日	ロンドン着。26日より3日間、公式訪問。【英国「訪問」】バックingham宮殿にて国王ジョージ5世よりウイクトリア大綬章御受。公式晩餐。*作品番号261《ウイクトリア大綬章》、同31《ハンドバッグ》
7月10日	バックingham宮殿にて儀式「コート」に参列される。*作品番号27《トレン》、同28《羽扇子》
7月12日	パリ着。17日ヴェルダン戦跡「視察」、22日セーブル国立製陶所御覧。*作品番号32《白磁植物文花瓶》、同33《海洋生物文噴水電燈》
7月29日	ブリュッセル着。【ベルギー国「訪問」】31日、レオポルド大綬章御受。8月2日、ヴァル・サン・ランベール硝子工場「視察」。
8月4日	ハーグ着。【オランダ国「訪問」】6日、獅子大綬章御受。アムステルダム、ロッテルダム等各「地」を「視察」。
8月13日	ブレメン着。【ドイツ国「訪問」】15日、ベルリンに滞在。
8月22日	ストックホルム着。【スウェーデン国「訪問」】セラファン大綬章御受。ウプサラに「視察」。
8月27日	ニダロス着。【ノルウェー国「訪問」】9月1日オスロ着、サン・オラフ大綬章御受。
9月3日	コペンハーゲン着。【デンマーク国「訪問」】白象勲章御受、陶器製造所等、市内外へ「巡覧」。
9月7日	ロンドン着。22日までバーミンガム、マンチェスター、エディンバラなど各地を「巡覧」。
9月23日	ハンブルグ着。ドレスデン、ライプツヒなど各地を「巡覧」。
10月6日	ベルリンより、鉄道にてポーランド国へ。
10月7日	ワルシャワ着。【ポーランド国「訪問」】8日、白鷲大綬章御受。
10月12日	ダンチツヒ市内へ「巡覧」。
10月14日	ポーランド国を経て14日、ベルリンへ。18日、大統領を「訪問」及午餐。フランクフルト、ライン地方、ケルン等各地を「巡覧」。
10月24日	パリ着。パリに滞在。31日、ピアリッツ着。
11月3日	マドリッド着。3日より3日間、公式訪問。【スペイン国「訪問」】国王アルフォンソ13世に菊花大綬章御贈進、殿下シャル・トリア頸飾章御受、妃殿下マリ・ルイズ大綬章御受、公式晩餐。
11月8日	モンテ・エストリル着。【ポルトガル国「訪問」】9日、公式訪問。大統領カルモナ將軍に菊花大綬章御贈進、殿下トレ・イ・エスバタ頸飾章、妃殿下サン・テイアゴ頸飾章御受。リスボンへ「巡覧」。

11月12日	セウイリア着。グラナダ、バルセロナへ「巡覧」。
11月18日	トゥーロン着。翌日より南仏へ「巡覧」。
11月26日	ジェノヴァ着。【イタリア国「訪問」】
12月5日	ローマ着。6日、アヌンツィアタ頸飾章御受。7日、ローマ法王へ「訪問」【バチカン市国「訪問」】29日までナポリ、フィレンツェ、ヴェネチアへ「巡覧」。トリエステで新年を祝う。*作品番号34《ムラーノ・グラス花瓶》

●昭和6年(一九三二)

1月3日	ベオグラード着。【ユーゴスラヴィア国「訪問」】殿下カラ・ゲオルゲ大綬章御受、妃殿下サン・サバ勲章御受。
1月6日	アテネ着。【ギリシア国「訪問」】7日、救世主勲章御受。アクロポリス其他市内外へ「巡覧」。ピレウス港よりイスタンブールへ。
1月13日	アンカラへ大統領「訪問」【トルコ国「訪問」】トプカピ宮殿、歴史博物館其他「ご覧」。
1月20日	ソフィア着。【ブルガリア国「訪問」】
1月22日	ブカレスト着。【ルーマニア国「訪問」】23日、カール皇帝勲章大綬章御受。
1月27日	ブダペスト着。【ハンガリー国「訪問」】ハンガリー有功十字勲章大綬章御受。
1月29日	ウィーン着。【オーストリア国「訪問」】30日、金色名譽勲章大綬章御受。31日、国立歌劇場にて「タンホイザー」を「覧」。2月4日、両殿下「成婚」1周年。
2月6日	プラハ着。【チェコスロバキア国「訪問」】白獅子勲章大綬章御受。市内へ「見物」。
2月9日	ベルリン着。17日よりハイデルベルク、ニュルンベルク、ミュンヘンなど南ドイツへ「巡覧」。
2月25日	サンモリッツ着。スキー、スケートに「練習」。
3月3日	リヨン着。絹織物及染物工場「視察」。
3月4日	パリ着。市内美術館などへ「巡覧」。17日、レジョン・ドヌール大綬章御受。*作品番号262《レジョン・ドヌール大綬章》
3月19日	ロンドン着。28日、バックingham宮殿午餐。
4月4日	サウサンプトン港発、米国へ。
4月10日	ニューヨーク着。【米国「訪問」】
4月15日	ワシントン着。ホワイトハウス晩餐。
4月21日	フィラデルフィア着。
4月23日	ボストン着。
4月28日	ケベック着。【カナダ国「訪問」】モントリオール、オタワ、トロント、ナイアガラ滝へ「覧」。
5月10日	デトロイト着。11日、フォード自動車工場「視察」。翌日、シカゴへ。
5月13日	サンタフェ鉄道にて北米大陸横断。16日、グラランドキャニオンへ「覧」。
5月17日	ロサンゼルス着。
5月22日	サンフランシスコ着。25日、ヨセミテ渓谷へ「覧」。
5月28日	秩父丸に乗船にてサンフランシスコ発、ご帰国の途に就く。
6月2日	ホノルル着。同日「出発」。
6月11日	横浜港着。

『高松宮同妃両殿下御外遊日誌』(高松宮家蔵版 昭和10年)を参考に作成。



昭和5年6月7日 パリ、マニュエル兄弟写真館にてご撮影



昭和5年5月31日 ナポリ国立博物館をご覧になる



昭和5年6月26日 英国ご上陸、グロスター公のお出迎えを受けられる



昭和5年8月3日 ブリュッセルにて独立100年祭の時代行列をベルギー王室の方々とご覧になる



昭和5年6月27日 ロンドン市長との午餐にご臨席



昭和5年11月4日 マドリッドにてプラド美術館をご覧になる



昭和5年11月3日 スペイン国マドリッドにご到着、アルフォンソ・デ・オルレアンス皇太子及びベアトリス内親王のお出迎えを受けられる



昭和6年4月15日 米国ホワイト・ハウスにおける大統領主催の晩餐の折、同女関にて



昭和5年11月28日 イタリア国トリノにご到着、ウンベルト皇太子及びマリー同妃のお出迎えを受けられる



昭和6年4月16日 東京市より寄贈された満開の桜の下、ワシントンのポトマック河畔を散歩される



24 御旅行用象牙御化粧セット
20世紀 象牙、ガラス ブラシ(大) 14.5×8.5×5.0ほか



25 御旅行用鼈甲御化粧セット
昭和5年(1930)頃 鼈甲、ガラス、皮革 ケース29.5×47.0×11.3

両殿下がご旅行の際にご使用になった御化粧セット。殿下の方は象牙で作られ、英国製。妃殿下の方は鼈甲製で、資料からご成婚当時に日本で作られたものとみられ、持ち運びができる専用の鞆形収納ケースに収められている。どちらも宮家の御紋付である。



26-2 レジオン・ドヌール大綬章(殿下御佩用)
1930年



26-1 ヴィクトリア大綬章(殿下御佩用)
1930年



昭和5年6月26日、英国に入られた両殿下は、ロンドン市民の盛大な歓迎の中、公式儀装馬車にヨーク公、グロスター公とご同乗になり、バッキンガム宮殿へ向かわれた。

昭和天皇の御名代として公式訪問された英国では、昭和5年6月26日、前年の天皇へのガーター勲章授与に対する答礼使の大役を果たされ、国王ジョージ5世からヴィクトリア大綬章(26-1)を贈られた。また、ご外遊を通じて最後のフランスご滞在の折の昭和6年3月17日、同国大統領ドゥメルグよりレジオン・ドヌール大綬章(26-2)をお受けになった。





29 妃殿下御肖像 ヴァンダイク 1930年 写真、着色 本紙35.2×26.8

昭和5年7月10日、両殿下はバッキンガム宮殿における儀式のひとつ「コート」に参列された。これは数百名の女性が正装をして英国王同妃に拝謁するもので、両殿下は国王同妃の直ぐ隣、英国王族の上席に並ばれている。妃殿下は、ティアラに大礼服(マント・ド・クール)、勲一等宝冠章佩用のお姿で、このトレーンを着用された。トレーンは肩に付ける形式で、背をV字に抜き、ビーズとスパンコールで表面を埋め尽くすように花模様が装飾されている。英国ご訪問前のパリ滞在中に誂えられたものと考えられる。なおこのトレーンとともに着装されたドレスは当館には引き継がれていない。

作品番号29は、この折の妃殿下御肖像写真。ヴァンダイクによる撮影で、パステルで着色している。ヴァンダイク(父カール:1850~1931、子ハーバート:1881~1943)は、バッキンガム宮殿近くに大きなスタジオを持ち、商業的にも成功していた写真家で、大正10年の皇太子(昭和天皇)、昭和12年の秩父宮雍仁親王と勢津子妃の英国ご訪問時の正装された御肖像の撮影も手がけている。

27 大礼服トレーン
1930年頃 象牙色織地、ビーズ装飾
裾巾110.5、全長310.0



28 羽扇子 1930年頃 ダチョウ羽、象牙 骨長21.6

ダチョウの羽を、象牙の骨に留め付けて扇子としたもの。大礼服とともにご使用になった。



30 薔薇模様ポレロ
1930年頃 スパンコール、ビーズ 身丈56.0、裾巾48.0

薄いジョーゼットの織地に地色と薔薇の模様を染め分け、全面に透明なスパンコールを縫い付けたポレロ。薔薇の周囲は銀のスパンコールとし、縁をビーズで飾った華やかなもの。昭和5年のご外遊の折、ヨーロッパまで乗船された鹿島丸の船中で妃殿下がお召しになったとの伝来がある。



31 ハンドバッグ

ガラード 1930年頃 革、金、ラピスラズリ、エマイユ 16.7×14.5×2.4

昭和5年に英国をご訪問された両殿下は、6月26日からの3日間、公式ご訪問としての接遇を受けられた。バッキンガム宮殿にご宿泊の2日目、贈進品のお取り交わしがあり、記録によれば英国王ジョージ5世とメアリー王妃から、殿下には「銀製果物盛器」が、妃殿下にはこのハンドバッグが贈られた。濃紺の革製で、口の金具はダイヤモンドやエマイユ（七宝）で装飾され、つまみ部分の青い石はラピスラズリである。英国王室御用達の宝石商、ガラードの制作による。





33 海洋生物文噴水電燈 セーヴル国立製陶所 1930年 陶磁 径31.2、高80.0

昭和5年7月22日、両殿下はパリ南西郊外のセーヴルにある国立製陶所を視察された。所長の案内で工場や各国の陶磁器を収蔵する博物館をご覧になった後、同国政府の依頼によって製作された花瓶（殿下へ）と噴水電燈（妃殿下へ）の献上を受けられた。セーヴル国立製陶所は、1925年にパリで開催されたアール・デコ博覧会でアンリ・ラパンをデザイナーに迎えて斬新な作品を数多く発表し、20世紀における現代生活の新様式の確立を目指す同国の文化政策の一翼を担っていた。ラパンはその後、東京の朝香宮邸の室内装飾も手がけている。両作品とも、ご訪欧当時の最先端であったアール・デコ様式の優美な器形、文様からなっており、わずかな金彩をほどこして、この時代特有の象牙色の釉薬が掛けられている。噴水電燈には側面に海水魚や海草など、海の生物が彫り表されている。

32 白磁植物文花瓶
セーヴル国立製陶所 1930年
陶磁 径41.0、高72.0





34 ムラーノ・グラス花瓶 M.V.M カッペリン工房 1930年頃 ガラス 径27.0、高42.5

イタリアのヴェネツィアに滞在された両殿下は、サン・マルコ寺院やドゥカーレ宮殿などの名所を巡覧された。妃殿下のお誕生日の翌日となる昭和5年12月27日、モーターボートに乗りムラーノ島へ赴かれた。彼の地の特産品であるガラス細工製造所をご覧になっており、この花瓶はその折のものであろう。底部に製造所のラベルが貼られている。ムラーノ島のガラスは、わが国でもヴェネツィアン・グラスという呼称で知られているが、その歴史は古く中世のヴェネツィア共和国の時代に発展したものである。鉛を含まないソーダ石灰を使用し、コバルトやマンガンなどの鉱物により色づけされている。空中で吹き上げて成形する製法のため薄手に作ることができ、本作も大きさの割に軽い仕上がりとなっている。



35-2 ボンボニエール 地球儀形
昭和6年(1931) 銀製 径5.7、高11.0



35-1 ボンボニエール 柄鏡箱形すみれ文
昭和6年(1931) 銀製 8.1×5.8×1.45

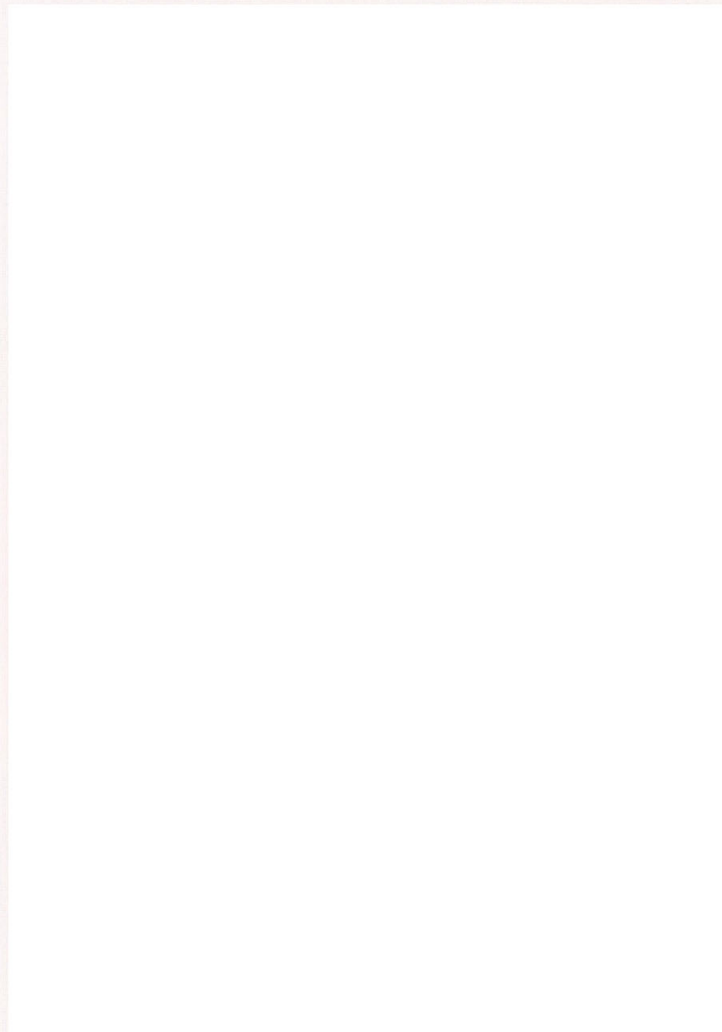
昭和6年6月11日、両殿下は秩父丸にて横浜にご到着、およそ1年2ヵ月にも及ぶ長旅を終えられた。帰国後、その日のうちに御所へご挨拶に向かわれている。そして、その後に各所へのご報告等に回られ、赤坂離宮での各関係者を招いての午餐や茶会、ご慰勞の宮中午餐にご出席などご帰国後の日々を忙しく過ごされた。

作品番号35-1は、同月18日にご帰国につき大宮御所で催された午餐の折のボンボニエール。手鏡形で、蓋表にスミレの花が彫られている。作品番号35-2は7月1日(『宣仁親王略年譜』では2日)に大宮御所での帰国祝賀ご内宴で貞明皇后より頂戴したものという。地球儀の頂点のつまみがネジとなっており、これを弛めると地球の部分が外れ、二つに分かれる仕組みとなっている。台座には御紋の左右に、松と撫子の花枝が彫られている。また、この他に詳細は不明ながらも、高松宮同妃両殿下御外遊記念との伝来で旧秩父宮家に伝えられたもの(右、参考図版)がある。三羽の鳩が地球を支えるもので、頂部に御紋が付けられている。



(参考図版)
ボンボニエール 地球形

お二人の日々



昭和30年2月4日 銀婚式を迎えられて



36 大三島図 松岡映丘 昭和7年(1932) 紙本着色 本紙135.0×180.0

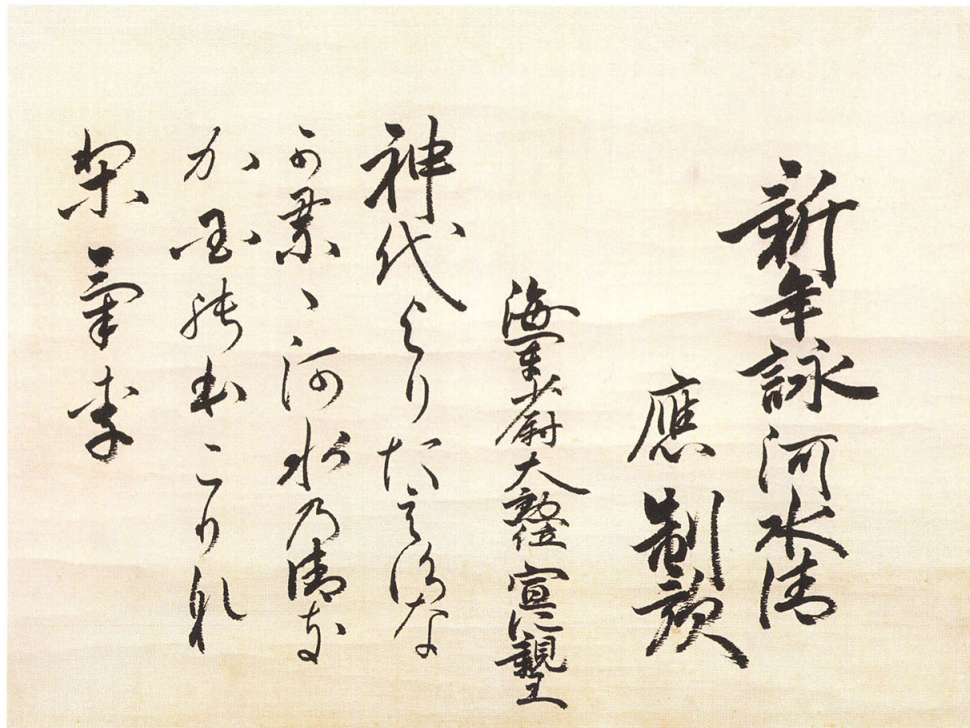
両殿下がお住まいになる高松宮邸は昭和6年12月に竣工、その謁見の間を飾るために、昭和天皇、香淳皇后より御贈進となった作品である。日本の風景を、という御下命を受けた松岡映丘(1881～1938)は、海軍大尉宣仁親王殿下にふさわしい画題として、古来より武門、特に水軍の鎮守として知られる大山祇神社が鎮座する、瀬戸内海の大三島を選び、現地での写生を経てこの絵を完成させた。壁画は、昭和48年に新築された高松宮邸にも移され、大食堂を飾るものとして使用され続けた。

昭和45年11月26日 光輪閣における高松宮妃癌研究基金・第1回国際シンポジウムの晩餐会。後ろに《大三島図》が見える。

竣工当時の高松宮邸洋館の外観(後の光輪閣)

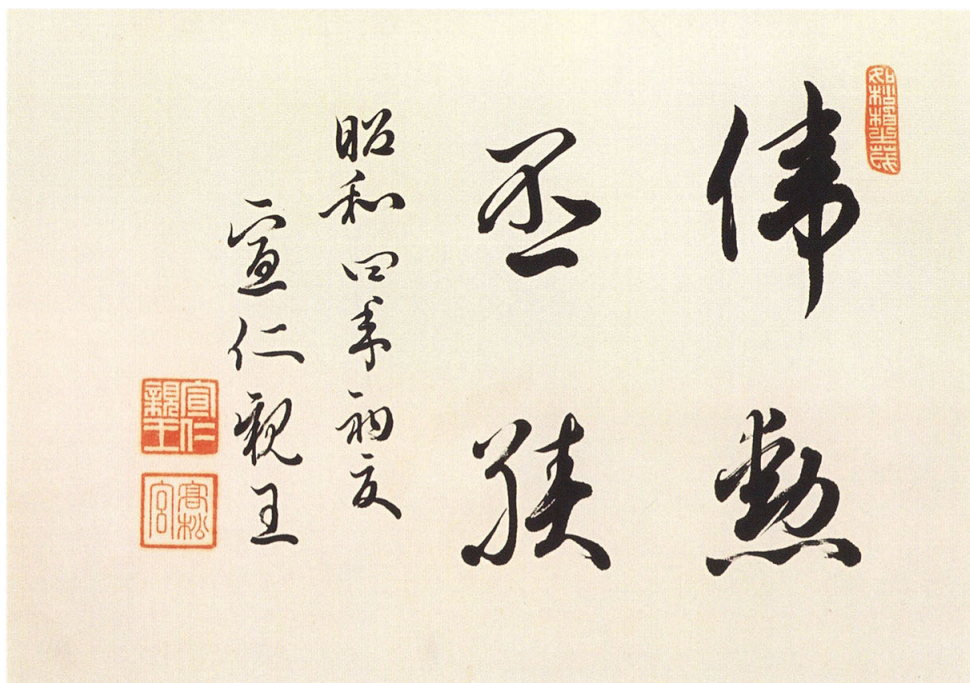
終戦後、同胞援護会総裁を務め、一般の住宅事情の悪さに心を痛められた殿下は、お住まいだった高松宮邸から、昭和21年9月9日、旧別当官舎東雲荘に移転された。同年12月、宮邸の洋館を一般に解放し、光輪閣と名付けて広く使用できるようにされた。光輪閣では内親王方のご婚儀が挙げられたほか、昭和31年のエチオピアのハイレ・セラシエ皇帝主催の晩餐会をはじめ、国賓関係の晩餐会が数多く開催されたが、47年に老朽化のため解体された。

竣工当時の高松宮邸洋館の内部。この壁面に《大三島図》が飾られた。



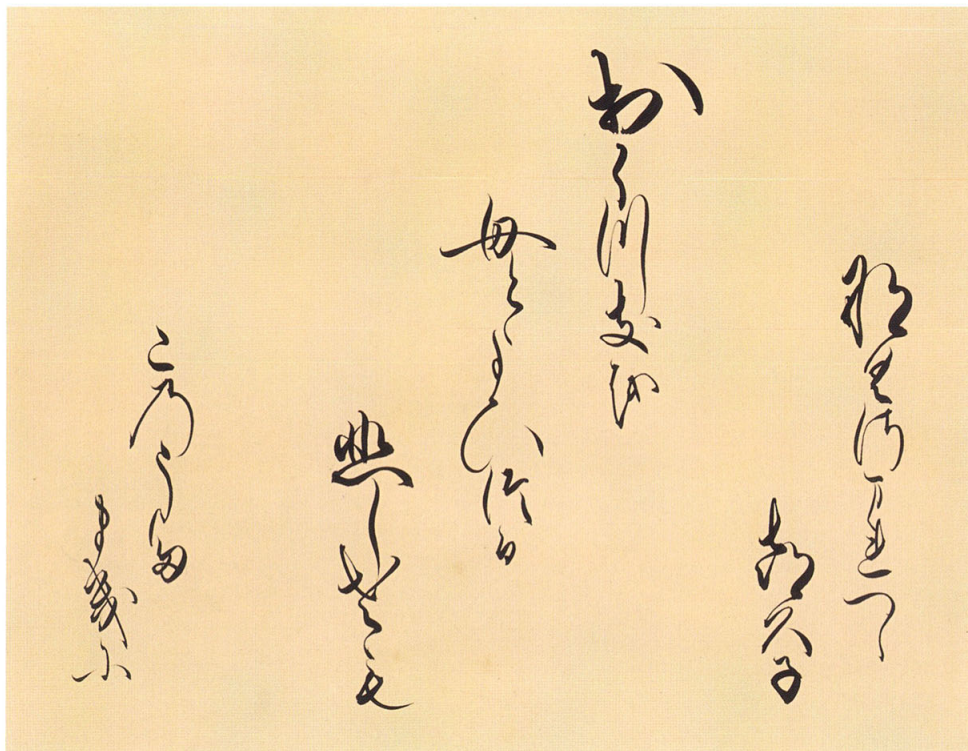
37 和歌懐紙 宣仁親王殿下 大正15年(1926) 紙本墨書 本紙44.9×59.6

大正15年歌御会始の詠進歌。御題は「河水清」。ご成年になった殿下は、この年初めて詠進され、貞明皇后は大変喜ばれた。これより前、御歌所寄人千葉胤明より懐紙の書き方を学ばれている。



38 偉勲丕績 宣仁親王殿下 昭和4年(1929) 紙本墨書 本紙26.5×37.6

偉勲、丕績、ともに大きな手柄やすぐれた功績を意味する。この御染筆は、昭和4年8月に刊行された『熾仁親王行實』の巻頭を飾った。殿下は『高松宮日記』の同年5月29日の記事に「夜、題字をかいたりす。偉勲丕績。」とお書きになっている。



39 和歌懐紙 喜久子妃殿下 昭和9年(1934) 紙本墨書 本紙29.5×37.9

昭和8年に妃殿下の御母上徳川實枝子様が逝去された。翌年、遺歌集『散りしく花』が編まれ、妃殿下は下巻の序にこの御歌を寄せられた。

おくつきを

母とよびつる

悲しさも

このうたまきに

なぐさまれつ、

喜久子

昭和63年3月30日 短冊に筆を運ばれる妃殿下



43-3 富士乃図 喜久子妃殿下 昭和45年(1970) 紙本墨画 本紙31.4×36.1

妃殿下は有栖川御流の書だけでなく、ご幼少の頃から日本画を嗜まれていた。《菖蒲》は八木岡春山(1879～1941)の指導を受けて描かれた。《富士乃図》は、昭和45年3月9日、光輪閣に児玉希望(1898～1971)を招いて、三宮妃殿下(高松宮妃、秩父宮妃、三笠宮妃)がお稽古をされた折のもので、ほぼ同図様の秩父宮勢津子妃による富士図が御殿場市の秩父宮記念公園に残されている。また、妃殿下は、香淳皇后とご一緒に前田青邨(1885～1977)の教えも受けられており、雁来紅を描いた《吹上御所にて》はその頃の御作とみられる。



43-1 菖蒲 喜久子妃殿下 昭和10年(1935)頃 紙本着色 本紙36.1×50.0



43-2 吹上御所にて 喜久子妃殿下 昭和37年(1962) 紙、鉛筆、水彩 本紙36.5×46.6

「或時の宮殿下」

41 むつの御旅

中川紀元 昭和24年(1949) 紙本墨画淡彩
本紙(第1図) 29.3×25.0、(第2図以降) 各32.9×44.5

殿下は終戦後の疲弊した国内状況に深く同情され、衣食住に恵まれない人々や傷病に苦しむ人々を支える社会福祉事業の発展に対して支援を惜しまれなかった。また、殿下は各団体に助言をお与えになるだけでなく、精力的に各地をお尋ねになって現地の人々を激励された。本画帖は、昭和24年5月に殿下が青森、岩手の国立療養所を視察された際、青森県の依頼により洋画家中川紀元(1892～1972)が同道して、訪問先の御様子のスケッチをまとめたものである。殿下のご肖像のほか、松丘療養所、七戸種馬牧場、三本木開墾地、種差海岸などを、初夏の爽やかさを感じさせる軽快な筆致で描いた全十二図が収められ、中川自身による跋文には殿下への献呈の辞が述べられている。

表紙

「松丘療養所ニテ」

(無題)

「種差海岸」

「松丘療養所園児の御歓迎」

「八戸海岸の鷗」



42 第11回国体明石庭球大会 川西英 昭和31年(1956) 木版画 本紙56.0×68.8

殿下はスキーを始め、様々なスポーツがお好きであった。スポーツの振興を通じて、国民の健康の増進、国家復興へとつながるとのお考えであった。各種競技に宮杯を賜り、競技の普及、振興に尽くされ、兄宮の秩父宮雍仁親王とともに「スポーツの宮様」として多くの国民から敬愛されていた。戦後まもなく始まった国民体育大会(国体)にも、国内各地で開催される毎年夏秋の大会にお出ましになり、お言葉を述べられた。川西英(1894～1965)による《第11回国体明石庭球大会》は、兵庫県で開催された昭和31年9月の第11回夏季大会にご臨席の折、明石公園で行われた軟式テニスの試合をご覧になっている様子を色鮮やかな木版画に仕立てた作品である。



昭和41年7月26日 三峰窯にて茶碗をご制作中の殿下



昭和41年8月9日 三峰窯にて絵付けをされる妃殿下

三峰窯でのご作陶



御殿場御別邸で療養生活を続けられていた殿下の兄宮である秩父宮雍仁親王は、陶芸に強い関心を持たれ、陶芸家の加藤土師萌に依頼して昭和二十五年（一九五〇）に御別邸内に三峰窯を築かれた。加藤の指導の下、雍仁親王は晩年の三年間、年に一度のやきもの作りに精魂を傾けられた。同二十八年に雍仁親王が薨去された後、三峰窯はしばらく使用されることはなくなる。やがて、雍仁親王を偲んで、宣仁親王殿下や三笠宮崇仁親王殿下のご兄弟やゆかりの方々が三峰窯に集まり、陶つくりの会が催されることとなった。

陶つくりの会は、昭和三十一年から五十一年までの長きに亘って合計十四回開催された。宮家のご都合により毎年の開催ではなかったが、会は七月や八月の暑い盛りに行われ、あたかも夏の恒例行事のような趣であった。殿下はこの陶つくりの会を一度も休まずにご出席なさった。ご作陶のときはいつもきまつて茶碗だけ、しかも三つ以上はお作りにならないという潔さであった。一方、妃殿下はお得意の書や絵をいかされ、土の感触を楽しみつつ様々な器をお作りになった。三峰窯以外にも、妃殿下は国内各地を訪問された折、地元陶芸家と共作の機会をもたれ、御染筆の御作品をいくつも残されている。なお、殿下の御作には古歌から採られた雅な御銘があり、妃殿下がすべて箱書きをなさっている。



44-1 三峰窯 志野風茶碗
銘 梅花 宣仁親王殿下 昭和33年(1958) 陶磁 径12.3、高7.8



44-2 三峰窯 飴釉茶碗
銘 山里 宣仁親王殿下 昭和38年(1963) 陶磁 径10.5、高8.6



44-3 三峰窯 瑠璃釉茶碗
銘 老松 宣仁親王殿下 昭和40年(1965) 陶磁 径12.0、高10.0



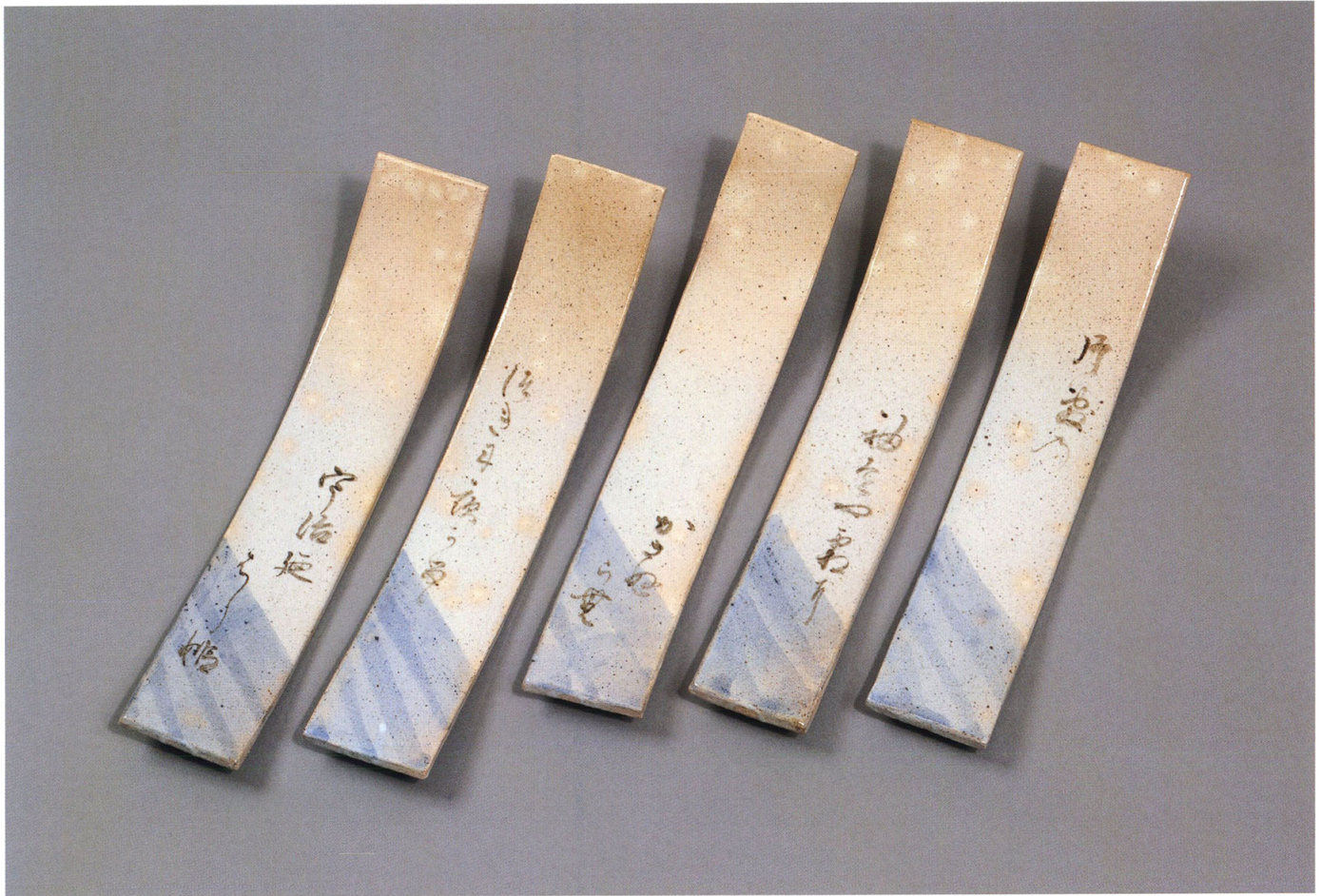
44-4 三峰窯 伊羅保茶碗
銘 夏乃夜 宣仁親王殿下 昭和49年(1974) 陶磁 径16.0、高6.7



44-5 三峰窯 白磁紅葉文花瓶
喜久子妃殿下 昭和42年(1967) 陶磁 径11.5、高9.8



44-6 三峰窯 鉄絵灰釉雀置物
喜久子妃殿下 昭和49年(1974) 陶磁 5.5×9.4×5.2



44-7 三峰窯 俎皿 銘 橋姫、江南
喜久子妃殿下 昭和51年(1976) 陶磁 各33.0×6.5×7.5



〈御銘の出典〉

片敷きの袖をや霜にかさぬらむ

つきに夜かるる宇治のはし姫

『新古今和歌集』卷第六 冬歌 法印幸清

十月江南天氣好 可憐冬景似春華

『白氏文集』卷二十 早冬 白居易



45-1 三峰窯 渦茶碗
加藤土師萌 昭和26年(1951) 陶磁 径11.0、高7.0

昭和31年7月29日 加藤土師萌より轆轤の指導を受けられる殿下

45-3 三峰窯 瑠璃釉陶硯
加藤土師萌 昭和40年(1965) 陶磁 10.1×9.0×2.0

45-2 三峰窯 鉄絵貝香合
加藤土師萌 昭和38年(1963) 陶磁 5.5×5.8×3.3

加藤土師萌(1900～68)は三峰窯の築窯を行っただけでなく、秩父宮雍仁親王の作陶指導も担当した。雍仁親王の薨去後、陶づくりの会に集った方々にも引き続いて指導を行い、そのかたわら、自らも小品を残している。45-1の茶碗は雍仁親王から殿下へ贈られたもので、初窯のときの作品である。45-2、3の香合と硯は、加藤から妃殿下への献上品である。



40-1 宮家御紋散蒔絵文箱
昭和17年(1942) 木製漆塗、蒔絵 22.2×13.5×5.0



40-2 若梅撫子文蒔絵文箱
昭和17年(1942) 木製漆塗、蒔絵 22.2×13.5×5.0

いずれの文箱も同寸のもので、全体に黒漆塗で銀覆輪を付け、内側は梨子地、白と紫の平打ち紐も共通するなど、同様の仕立てによる。作品番号40-1は高松宮家の御紋が散らされ、40-2には両殿下のお印にちなんだ梅枝と撫子の花枝が蒔絵で散らされている。妃殿下が大切にお手許に置かれてきたお品である。箱書きから、京人形の老舗、田中彌の制作による。

昭和55年2月4日 金婚式を迎えられて



46-2 ボンボニエール 丸形若梅に撫子文
昭和55年(1980) 銀製 径6.05、高3.35



46-1 ボンボニエール 菊花形双鶴若梅撫子文
昭和30年(1955) 銀製 径4.9、高2.2

昭和30年2月4日、両殿下はご成婚25年(銀婚式)を迎えられ、11日には御所で催された祝賀晩餐のため参内された。作品番号46-1はこの折のボンボニエールで、菊花形で双鶴と両殿下のお印の梅と撫子の花が散らされた図様である。また昭和55年にはご成婚50年(金婚式)を迎えられ、2月19日に吹上御所で催されたご内宴で、昭和天皇香淳皇后より記念の品として拝領されたのが作品番号46-2のボンボニエールである。蓋表には殿下のお印が、側面には妃殿下のお印が彫刻されている。

受け継がれた品々





47 修学院焼ふくべ形香炉 江戸中期(18世紀前半) 陶磁 径18.0、高17.5

修学院焼は、修学院離宮内で後水尾上皇と霊元上皇の時代に作られた御庭焼である。現存作例が少なく、本作はきわめて貴重な遺品に数えられる。伝来から、享保年間(18世紀前半)の霊元上皇の時代に製作されたと推定される。瓢とは、かんびょうの原料となるウリ科ユウガオの実のこと。蓋となる葉は細かい葉脈まで表されており、実物をそのままやきものにしたかのような、すぐれた写実的造形である。底部に扇形に「壽」の鉄絵による銘がある。



蓋を被せた姿



48 瓢形丁子風炉

江戸後期(18世紀) 風炉：銀製、台：木製蒔絵 風炉24.3×25.5×30.0、蒔絵台29.5×29.5×6.3

丁子は、アジアの熱帯地域に産する強い芳香を放つ香料で、日本でも古くより用いられてきた。防臭や防腐のために、丁子を煎じてその香気を室内に焚きこめる道具が丁子風炉である。本品はその形や装飾が瓢箪の意匠で統一された丁子風炉で、銀地に細やかな地紋が彫刻され、金銀の象嵌で装飾し、炉には葉や実の形に透かしも施されている。また梨子地蒔絵の台をとまなう。精緻な工芸技術が尽くされた優品である。もとは井上馨旧蔵で、明治15年の第3回観古美術会に出品されており、この翌年に宮内省が買上げ、後に御物として保管されていた品である。貞明皇后崩御の後に、妃殿下がご遺品として引き継がれた。



49 歌蒔絵重硯箱 江戸後期(18～19世紀) 木製漆塗、蒔絵 総24.5×21.5×17.5

歌会などの席で使用された重硯箱で、被せ蓋をともなう。最下段の硯箱の上に小硯箱を2組4段で重ねて一つの組み合わせとしている。被せ蓋の各面にそれぞれ『古今和歌集』や『金葉和歌集』『新千載和歌集』『壬二集』から採り上げた賀歌1首、四季の和歌4首とその歌絵を蒔絵で表しており、小硯箱の蓋には杜甫の五言律詩の一節が蒔絵されている。小硯箱の側面にはそれぞれの段に唐草や卍繫、七宝文などの連続文様が研出蒔絵で表されている。各箱に収められた水滴は銀地に七宝が施されたもので、すべて形が異なり、それぞれ菊や梅、笹などの草花が主題となっている。伝来によれば、昭和21年10月12日に貞明皇后が宮邸に行啓された折に殿下が拝領されたもので、もとは明治16年に宗重正から買上げ、皇室に伝えられてきた品である。



59 菊に鶴蒔絵提重

大正6年(1917)頃 木製漆塗、蒔絵 総17.3×18.3×26.0



60 藤花蒔絵提重

大正7年(1918)頃 紫檀、蒔絵 総15.0×15.0×19.7

宮家には殿下がまだご幼年の頃に、ご両親の大正天皇、貞明皇后よりご拝領になった提重が幾つか伝えられていた。作品番号59は菊花に鶴の模様の三段重のもので、大正6年8月塩原御用邸にご滞在になり28日に帰京される折のもの。作品番号60は紫檀地に藤花と亀甲文を蒔絵で表した四段重で、大正7年7月にお兄様の雍仁親王と京都御旅行の折のもの。お料理などを詰め、実用でお使いになったものであろう。



50-4 和筆 無銘
穂：鹿毛、軸：木、朱漆塗
金泥絵、籐巻 長36.4



50-3 和筆 無銘
穂：山羊毛、軸：竹 長59.0



50-2 和筆 「筆龍」
穂：山馬毛、軸：紫竹、黒塗籐巻金具
付 長61.0 銘「筆龍 明治貳十年第
三月 以山馬毛雲平製之」



50-1 和筆 無銘
穂：羊毛、軸：ケヤキ 長62.0

50 有栖川御流筆

10本 江戸末期～明治期 (19世紀～20世紀初頭)

有栖川宮家は、歌道と書道を家学とし、代々の親王が両道に励まれた。同家に継承されてきた書流が後世に有栖川御流と称せられている。有栖川宮家の筆は、後に高松宮家に引き継がれ、この書風を継承された妃殿下が実際にご使用にもなり、現在50本が当館に伝えられている。和筆と唐筆の2種に大きく分けられ、和筆の多くは京都の攀桂堂十二世藤野雲平によるもの(50-2、5、6、7)。これらは、江戸時代まで筆の主流であった巻筆(穂の芯を和紙で巻き固める)の技法で制作されていることが特徴である。唐筆には上海で製筆されたことを示す李鼎和や馮畊三の銘が刻まれている。

昭和52年5月14日、後鳥羽上皇記念碑除幕式にご臨席(現隠岐島海士町)。碑文は妃殿下が50-7の筆でご揮毫になったもの。



50-7 和筆 「筆龍」
穂：鹿毛、軸：紫竹、黒塗籐
卷金具付 長31.5 銘「筆龍
京師攀桂堂 藤野雲平製」



50-6 和筆 「筆龍」
穂：鹿毛、軸：紫竹、黒塗籐
卷金具付 長33.5 銘「筆龍
京師攀桂堂 藤野雲平製」



50-5 和筆 「筆龍」
穂：鹿毛と馬毛の混合、
軸：斑竹、黒塗籐卷金具
付 長29.0 銘「筆龍 明
治廿年九月 大日本雲
平製之」

妃殿下は、済生会福井病院新築記念に御額字をお寄せになった。50-6の筆を用いて平成5年5月19日にご揮毫。



50-10 唐筆
穂：羊毛、軸：斑竹 長
30.4 銘「同治歳在甲
戌秋日上海馮咄三監製」



50-8 唐筆
穂：羊もしくは山羊毛、
軸：紫檀 長27.4
銘「廉文竹製」



50-9 唐筆
穂：馬毛、軸：紫檀 長24.7
銘「李鼎和大揅」

妃殿下の歌碑 東村山市の国立療養所多磨全生園にある高松宮記念ハンセン病資料館の前庭にある。資料館竣工にともなう歌碑建立に寄せて、50-5の筆を用いて平成5年5月4日にご揮毫。

残りたるよはひ
いとひて春秋を
共にたのしく
すぐせとぞ思ふ



51 色絵四季草花図食器 幹山伝七 明治前期(19世紀) 陶磁 鉢(大)径34.0、高18.0ほか

有栖川宮家のために製作された和食器のセット。幹山伝七(1821~90)は湖東焼の出身で、明治になり京都へ移って色絵磁器の製作を始めた。国内の富裕層や海外からも注文を受けて、色鮮やかな花鳥図を精緻に描いた数々の作品を製作し、明治前期の京都を代表する製陶家となった。幹山は清水に大規模な工場を構えていたが、実用品であったためか現存する食器類は少なく、大正、昭和と時代を経るにしたがって忘れられていた。高松宮家には大鉢のほか、碗や皿、徳利など、同時期に製作されたとみられる合計540点の和食器が伝わっており、質だけでなく点数の規模からみても貴重な作品群である。



51 鉢(大)の部分



52 有栖川宮家御紋付花盛器 クリストフル 19世紀 銀製 40.0×72.0×20.5

作品番号52はクリストフルの銀製花盛器で、有栖川宮家の御紋が中央前後に彫り込まれている。この銀製花盛器は、同型のものが4点伝えられている。クリストフルは1830年創業のフランスの高級銀製品メーカー。有栖川宮家伝来品としては、他にリモージュ製の磁器食器、バカラ製と伝えられるグラス類があり、高松宮家の公式晩餐会においても使用された。作品番号53、54のガラスの洗面用品と香水入は、大正15年に崩御された大正天皇の御遺品である。殿下のご年譜によれば、昭和5年4月に御遺品の洗面器や水差等を拝領されたとあり、本品を指すものと思われる。19世紀末から20世紀初期にヨーロッパで流行していた、ベルギーのヴァル・サン・ランベールのカットグラスと、チェコのモーゼルの色ガラスによる製品である。



53 紅カットグラス洗面用器 ヴァル・サン・ランペール 20世紀 ガラス 水差16.0×22.5×32.2ほか



54 色ガラス香水入 モーゼル 20世紀 ガラス 蓋付容器(大)径10.4、高12.2ほか



桜松に群鶴図 狩野応信



梅に鶯図 山名貫義



牡丹に鸚哥図 佐竹永郎



松に鶴図 荒木寛畝



表紙

55 雍熙帖

山名貫義ほか 明治33年(1900) 絹本着色
本紙各32.1×41.2

貞明皇后の御遺品として、高松宮家に伝えられた画帖。明治33年の皇太子嘉仁親王(大正天皇)のご成婚を祝って、枢密院書記官以下高等官一同より献上された品である。題名の「雍熙^{ようき}」とは、和やかな楽しみを意味し、慶祝の意が込められた四季折々の花鳥が描かれている。画帖には、日本美術協会系の12名の画家が名を連ねており、伝統的な画法を守った堅実な描写表現が認められる。



菊花小禽図 大出東阜



菖蒲に鯉図 奥原晴翠



竜胆に鶉図 小堀鞆音



柳に鷹図 狩野探溟



寒牡丹に雀図 村瀬玉田



桔梗撫子に雀図 跡見花蹊



南天に雀図 在原古玩



飛来鶴図 熊谷直彦



56 鶏の図 川村清雄 明治~大正期(20世紀) 油彩、色紙 本紙25.5×22.7

川村清雄(1852~1934)は明治大正期に活躍した洋画家である。イタリアに留学し、本格的な油彩技法を身につけ、帰国後は日本的な油彩画の完成を目指して独自の道を切り開いた。川村は幕臣の家系出身で、徳川宗家の給費生として留学するなど、維新後も徳川家との深いつながりがあった。本作は妃殿下がご成婚の際に、徳川家より持参されたものである。殿下が薨去された後、御遺品として秩父宮勢津子妃へ贈られた。



57 御紋付七宝鶏に秋草図花瓶
 瀧川惣助 明治期(20世紀初頭) 七宝 各径18.6、高42.3

瀧川惣助(1847~1910)は明治期を代表する七宝家として知られ、優れた作家の栄誉である帝室技芸員にも任命された。宮内省の製作依頼を数多く請け負っていたとみられ、本作のように御紋付の作品が現存している。数々の七宝釉薬を調整して柔らかな色合いを生みだし、繊細な花鳥画の風韻をみごとに表している。



裏面



58 宝玉七宝 鳳凰形香炉 梶佐太郎 明治~大正期(20世紀) 七宝 9.0×58.0×21.5

宝玉七宝とは、明治期から大正期にかけて、川崎造船社主の川崎正蔵が尾張七宝出身の梶佐太郎(1859~1923)に作らせた、中国明時代の七宝の技術を再現したものである。昭和24年2月に貞明皇后よりいただかれた。

61 赫夜姫昇天

野口光彦 昭和28年(1953)
木彫胡粉塗、彩色 21.0×26.0×42.0

昭和28年に開催された第9回日本美術展覧会(日展)第4科美術工芸の依嘱出品作。野口光彦(1896~1977)は御所人形を現代的にアレンジして、独自の創作人形を作りだした。戦後は日展や日本工芸会で活躍し、現在の人形芸術の基礎を築いた。

「若梅に撫子」旧高松宮家と伝来の品々」関連略御年譜

※御年譜は、宣仁親王殿下と美術に関連する主要事項を中心に作成した。展覧会については、戦前はご覧になったもの、戦後は総裁に就任されたものを主に記載した。作成にあたっては、『宣仁親王略御年譜』一〇九を基本資料として、一〇四頁の主な参考文献を参照した。

年(西暦)	設下紀殿下 年齢年齢	月日	両殿下に関する事項	美術に関する主な事項	関連作品(Noは作品番号)
明治38年 (一九〇五)	0	1月3日 1月4日 1月9日 1月20日 3月18日 3月18日 3月22日 6月9日 11月12日 9月27日 1月3日 4月14日 4月11日 12月26日	皇太子嘉仁親王(大正天皇)の第三皇子として青山離宮内御産所においてご誕生。御母は皇太子妃節子(貞明皇后)。 天皇より御剣(御守刀)を賜る。お印を若梅と定められる。 命名の儀、御名を宣仁(のぶひと)と賜り、光宮(てるのみや)と称せられる。 御父嘉仁親王に初めて対面。 宮中三殿初参拜次いで初参内。天皇・皇后に初めて謁する。 皇太子妃に伴われ沼津御用邸に転地。御兄裕仁・雍仁両親王に初めて対面。 御著初の儀。 青山離宮内皇孫御殿に移居。以後、裕仁・雍仁両親王と同居される。 皇太子に伴われ初めて有栖川宮邸をご訪問。 皇太子妃より五歳の御祝として御紋付衣服・羽織・袴をご拝領。初めて袴をご着用。		No.2《御命名書》、 No.5《天盃》 No.4《櫛兜》 No.6《青漆塗御菓子文庫》
明治40年 (一九〇七)	2	1月3日 4月14日 4月11日	皇太子妃より誕生の御祝として御紋付衣服・羽織・袴をご拝領。初めて袴をご着用。 学習院幼稚園ご入学。 学習院初等科ご入学。		
明治42年 (一九〇九)	4	1月3日 4月14日 4月11日	皇太子妃より誕生の御祝として御紋付衣服・羽織・袴をご拝領。初めて袴をご着用。 学習院幼稚園ご入学。 学習院初等科ご入学。		
明治44年 (一九一〇)	6	12月26日	徳川喜久子様、公爵徳川慶久の第二女子として小石川・小日向第六天町の徳川公爵邸においてご誕生。御母は徳川實枝子。		
明治45年 (一九一〇)	7	元旦 7月30日	喜久子と命名される。お印は亀(ご成婚後、撫子に変わる)。 明治天皇崩御。大正天皇踐祚。		
大正元年 (一九一〇)	8	12月26日	高松宮の称号を賜り、有栖川宮の祭祀を継承される。		No.7《示高松宮》
大正二年 (一九一三)	9	1月9日 2月13日	昭憲皇太后崩御。 有栖川宮威仁親王薨去。		
大正三年 (一九一四)	10	7月6日 7月10日 11月12日	昭憲皇太后崩御。 有栖川宮威仁親王薨去。		
大正四年 (一九一五)	11	12月2日	澄宮崇仁親王(三笠宮)殿下、大正天皇第四皇子としてご誕生。		
大正五年 (一九一六)	12	12月1日	即位礼。		
大正六年 (一九一七)	13	10月28日	学習院初等科ご卒業。 学習院中等科ご入学。		
大正七年 (一九一八)	14	4月	喜久子様、学習院女子部小学部へご入学。		
大正九年 (一九二〇)	15	3月31日 4月1日 4月24日	学習院中等科第三学年修業。皇后より海軍剣をご拝領。 この日より海軍教育を受けられる。		
大正十年 (一九二一)	16	5月11日	江田島海軍兵学校入学式。		
大正十一年 (一九二二)	17	12月24日	喜久子様、学習院女子部小学部へご入学。		
大正十二年 (一九二三)	18	1月22日 2月8日 6月4日 7月1日	熾仁親王妃節子薨去につき(7日)、葬儀の喪主を務められる。 熾仁親王妃節子薨去につき(7日)、葬儀の喪主を務められる。 威仁親王妃慰子薨去につき(6月30日)、葬儀の喪主を務められる。		
				大阪市立商品陳列所で仏国現代美術展覧会をご覧。	
				海軍大学の有栖川宮威仁親王銅像除幕式にご臨席。	
				皇后の東京帝室博物館表慶館の醍醐寺宝物仏画をご覧に陪従される。	
				文部省美術展覧会をご覧。	
				欧州戦役絵画展覧会をご覧。	
				御大典無事終了につき天皇・皇后より鮮鯛・置物等をご拝領。	
				上野公園の東京大正博覧会をご覧。 昭憲皇太后御遺品の置物等をご拝領。 明治天皇御遺品の置物等をご拝領。 正倉院をご見学。	

大正13年 (一九二四)	19	13	9月1日 関東大震災。殿下、江田島海軍兵学校に帰校中。 12月23日 3月10日 海軍兵学校へ卒業。海軍少尉候補生となられる。 7月24日 8月31日 皇子御殿より麹町三年町の旧有栖川宮邸に移居される。 12月2日 天皇より太刀・指揮刀各一振を拝領。	熾仁親王妃董子の御遺品の御紋付棚等を受けられる。 威仁親王妃愍子の御遺品の詩絵函入茶室等を受けられる。	
大正14年 (一九二五)	20	14	1月13日 成年式。 1月25日 1月28日 1月30日 2月4日 5月15日 8月4日 皇太子(昭和天皇)に随い樺太へ旅行のため、軍艦「長門」に乗艦される。17日まで。 9月15日 11月7日 11月8日 11月11日 海軍少尉に任官される。大勲位に叙せられ、菊花大綬章を授けられる。	工学博士関野貞の進講する「仏像に就て」を聴聞される。 奈良博物館に立ち寄られる。 東山御文庫の御物を拝観される。 瀧精一の進講する「日本美術史」を聴聞される。以後、11月5日まで17度継続。 帝室博物館表慶館の大婚特別陳列品を拝観。 日本美術協会美術展覧会・二科展・仏蘭西美術展覧会を拝観。 和田英松博士の説明により、有栖川宮伝来の宸翰及重宝図書等を拝観。 奈良にて正倉院御物を拝観される。	No.11(ボンボンエール)、 No.9(高松宮御成年奉祝 詠進歌色紙帖)
大正15年 (一九二六)	21	15	1月9日 6月1日 6月7日 10月30日 11月10日 12月1日 海軍水雷学校普通科へ入学。 12月25日 大正天皇崩御。 12月25日 昭和と改元。	瀧精一の進講する「日本美術史」を聴聞される。以後、21日まで9度継続。 聖徳太子奉讃美術展覧会を拝観。 京都博物館を拝観。 東京帝室博物館の若冲特別展覧会を拝観。 帝室博物館の中央並細垂発見古画模本特別陳列を拝観。	No.10(大勲位菊花大綬章)
昭和元年 (一九一七)	22	16	2月21日 3月4日 4月6日 4月13日 海軍水雷学校普通科へ卒業。 4月14日 海軍砲術学校普通科へ入学。 5月27日 7月27日 海軍砲術学校普通科へ卒業。 12月1日 海軍中尉にご進級。 12月4日 喜久子様、御母と御弟の徳川慶光公爵と共に参殿され、殿下と初めてご対面。次いで葉山徳川公爵邸に同行され、細川護立侯爵と共にご歓談。	瀧精一の進講する「日本美術史」を聴聞される。以後、6月20日まで14度継続。 御名代奉仕につき天皇より陶製花瓶一対を拝領。 雍仁親王と共に上野公園にフランス現代美術展覧会・槐樹社展覧会を拝観。 東京朝日新聞社ロシア美術展覧会を拝観。 帝室博物館及び日本美術協会の川村清雄作品展覧会を拝観。	
昭和3年 (一九一八)	23	17	4月7日 4月21日 5月22日 7月12日 即位礼。 11月10日 11月14日 12月29日 12月18日 2月21日 日本美術協会総裁にご就任。 3月 喜久子様、女子学院本科を卒業。 4月12日 徳川慶光公爵の姉喜久子様とご結婚の内約、天皇より聴許される。 5月18日 皇太后のお召しにより、青山東御所で聴許後初めて徳川實枝子様、喜久子様とご歓談。 10月8日 殿下、ご入院につき、喜久子様、生花をお届けになる。 10月15日 殿下、ご入院につき、喜久子様、置物をお届けになる。 11月1日 11月13日	皇太后より大正天皇御遺品の油絵(間部時雄筆「山蔭」)を拝領。 帝室博物館表慶館を拝観。 華族会館に細川護立侯爵蒐集の陶器を拝観。 成年に当たり、大正天皇より目録にてご拝領の屏風二双(山元春拳画「春の海辺」)が完成。 皇后より額(版画)及び洋服地(フロックコート)を拝領。 京都恩賜博物館を拝観。 支那古名画展覧会・唐末元明絵画特別展覧会を巡覧。 大丸無事終了につき天皇・皇后より額(和田英作筆「油絵静物」)を拝領。	山元春拳「春の海」(愛媛県美術館所蔵)
昭和4年 (一九一九)	24	18	11月13日	瀧精一の進講する「日本美術史」を聴聞される。以後、12月25日まで9回継続。 三越呉服店の伊太利絵画彫刻展覧会を拝観。	

昭和5年 (一九三〇)	25	19	<p>11月21日 喜久子様、御母と共に参殿され、殿下にお会いになる。</p> <p>11月22日 明春、英国御差遣の御沙汰あり。</p> <p>11月27日</p> <p>12月2日</p> <p>12月4日</p> <p>12月7日 病氣平癒・仮御殿増築落成の披露を兼ね、徳川實枝子様・喜久子様を招かれ、ご晩餐。</p> <p>12月13日</p> <p>12月14日</p> <p>12月19日 納采の期日、昭和5年1月17日とご内定。</p> <p>1月17日 納采の儀。</p> <p>1月23日 告期の儀。</p> <p>1月25日 ス페인国御差遣の御沙汰あり。</p> <p>2月1日 徳川實枝子様・喜久子様、参殿され、ご晩餐。</p> <p>2月4日 ご婚儀。</p> <p>2月18日 赤坂離宮でご成婚披露宴。皇族、親任官待遇以上、各国大公使、閣僚ら出席。</p> <p>2月19日 赤坂離宮で同宴。宮内省、海軍省、徳川縁故者ら出席。以後、三月九日まで、学習院、旧奉仕者出席などの祝宴が続く。</p> <p>3月11日 英国並びにスペイン国御差遣をもって、喜久子妃同伴の欧米旅行について勅許される。</p> <p>4月13日</p> <p>4月21日 鹿島丸にて横浜港を出帆、ご外遊の途に就かれる。(ご外遊日程の詳細は49頁を参照)</p> <p>6月11日 横浜に入港。ご帰国。</p> <p>7月6日</p> <p>9月23日 日丁協会総裁にご就任。</p> <p>10月25日</p> <p>10月31日</p> <p>12月7日 横須賀海軍砲術学校ご通学。</p> <p>12月12日 高松宮新邸落成。</p> <p>12月19日 高輪御料地内仮御殿より同地内新邸に移居される。</p> <p>12月19日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>6月30日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>10月4日 華族会館名誉会員となられる。</p> <p>11月6日</p> <p>11月29日 海軍砲術学校高等科ご卒業。</p> <p>12月1日 軍艦「高雄」分隊長に補せられる。</p> <p>12月9日 日伯中央協会総裁にご就任。</p> <p>3月1日</p> <p>4月25日 徳川實枝子様逝去。</p> <p>7月30日</p> <p>11月20日 呉の軍艦「扶桑」にご着任。</p> <p>12月2日 呉市金谷氏別荘からご通勤。</p> <p>12月27日 神奈川県箱根元宮ノ下御用邸をご取得。</p> <p>1月5日 東京市に麻布区盛岡町及び広尾町所有御用地二万九百八十八坪二合をご下賜(現有栖川宮記念公園)。</p> <p>5月24日 国際文化振興会総裁にご就任。</p> <p>5月31日 有栖川宮記念として東京府に麻布区盛岡町御用地五千八百八十二坪をご下賜。</p> <p>6月3日</p> <p>7月7日</p> <p>11月10日 海軍大学校ご入学。</p> <p>11月18日 開園した有栖川宮記念公園をご巡覧。</p> <p>この年、妃殿下、財団法人癌研究会にラジウムをご寄附。</p>	<p>参内、雅仁親王同妃等と共にローマにおいて開催される日本美術展覧会出品作品をご覧。</p> <p>華族会館の英国女流画家エリザベス・キースの版画展をご覧。</p> <p>雅仁親王同妃と共に三越呉服店の仏蘭西工芸品展覧会をご覧。</p> <p>銀座資生堂の立体写真撮影所において写真撮影。</p> <p>今泉雄作の進講する「陶器その他美術品に就き」を聴聞される。同月18日まで3回継続。</p>	<p>No.12 (ロブ・デフルエ、No.13 《照一等宝冠章》、No.14 《黒地乱菊模様振袖》、No.15 《赤ンボニール》、No.16 《高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖》、No.17 《御成婚記念メダル》、No.18 《スキーヤー形文鎮》)</p> <p>No.53 《紅カットガラス洗面用器》、No.54 《色ガラス香水入》 関連作品は49頁を参照。</p> <p>No.35 《ボン・ボニール》</p>
昭和6年 (一九三一)	26	20	<p>4月21日 鹿島丸にて横浜港を出帆、ご外遊の途に就かれる。(ご外遊日程の詳細は49頁を参照)</p> <p>6月11日 横浜に入港。ご帰国。</p> <p>7月6日</p> <p>9月23日 日丁協会総裁にご就任。</p> <p>10月25日</p> <p>10月31日</p> <p>12月7日 横須賀海軍砲術学校ご通学。</p> <p>12月12日 高松宮新邸落成。</p> <p>12月19日 高輪御料地内仮御殿より同地内新邸に移居される。</p> <p>12月19日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>6月30日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>10月4日 華族会館名誉会員となられる。</p> <p>11月6日</p> <p>11月29日 海軍砲術学校高等科ご卒業。</p> <p>12月1日 軍艦「高雄」分隊長に補せられる。</p> <p>12月9日 日伯中央協会総裁にご就任。</p> <p>3月1日</p> <p>4月25日 徳川實枝子様逝去。</p> <p>7月30日</p> <p>11月20日 呉の軍艦「扶桑」にご着任。</p> <p>12月2日 呉市金谷氏別荘からご通勤。</p> <p>12月27日 神奈川県箱根元宮ノ下御用邸をご取得。</p> <p>1月5日 東京市に麻布区盛岡町及び広尾町所有御用地二万九百八十八坪二合をご下賜(現有栖川宮記念公園)。</p> <p>5月24日 国際文化振興会総裁にご就任。</p> <p>5月31日 有栖川宮記念として東京府に麻布区盛岡町御用地五千八百八十二坪をご下賜。</p> <p>6月3日</p> <p>7月7日</p> <p>11月10日 海軍大学校ご入学。</p> <p>11月18日 開園した有栖川宮記念公園をご巡覧。</p> <p>この年、妃殿下、財団法人癌研究会にラジウムをご寄附。</p>	<p>参内、雅仁親王同妃等と共にローマにおいて開催される日本美術展覧会出品作品をご覧。</p> <p>華族会館の英国女流画家エリザベス・キースの版画展をご覧。</p> <p>雅仁親王同妃と共に三越呉服店の仏蘭西工芸品展覧会をご覧。</p> <p>銀座資生堂の立体写真撮影所において写真撮影。</p> <p>今泉雄作の進講する「陶器その他美術品に就き」を聴聞される。同月18日まで3回継続。</p>	<p>No.12 (ロブ・デフルエ、No.13 《照一等宝冠章》、No.14 《黒地乱菊模様振袖》、No.15 《赤ンボニール》、No.16 《高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖》、No.17 《御成婚記念メダル》、No.18 《スキーヤー形文鎮》)</p> <p>No.53 《紅カットガラス洗面用器》、No.54 《色ガラス香水入》 関連作品は49頁を参照。</p> <p>No.35 《ボン・ボニール》</p>
昭和7年 (一九三二)	27	21	<p>4月21日 鹿島丸にて横浜港を出帆、ご外遊の途に就かれる。(ご外遊日程の詳細は49頁を参照)</p> <p>6月11日 横浜に入港。ご帰国。</p> <p>7月6日</p> <p>9月23日 日丁協会総裁にご就任。</p> <p>10月25日</p> <p>10月31日</p> <p>12月7日 横須賀海軍砲術学校ご通学。</p> <p>12月12日 高松宮新邸落成。</p> <p>12月19日 高輪御料地内仮御殿より同地内新邸に移居される。</p> <p>12月19日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>6月30日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>10月4日 華族会館名誉会員となられる。</p> <p>11月6日</p> <p>11月29日 海軍砲術学校高等科ご卒業。</p> <p>12月1日 軍艦「高雄」分隊長に補せられる。</p> <p>12月9日 日伯中央協会総裁にご就任。</p> <p>3月1日</p> <p>4月25日 徳川實枝子様逝去。</p> <p>7月30日</p> <p>11月20日 呉の軍艦「扶桑」にご着任。</p> <p>12月2日 呉市金谷氏別荘からご通勤。</p> <p>12月27日 神奈川県箱根元宮ノ下御用邸をご取得。</p> <p>1月5日 東京市に麻布区盛岡町及び広尾町所有御用地二万九百八十八坪二合をご下賜(現有栖川宮記念公園)。</p> <p>5月24日 国際文化振興会総裁にご就任。</p> <p>5月31日 有栖川宮記念として東京府に麻布区盛岡町御用地五千八百八十二坪をご下賜。</p> <p>6月3日</p> <p>7月7日</p> <p>11月10日 海軍大学校ご入学。</p> <p>11月18日 開園した有栖川宮記念公園をご巡覧。</p> <p>この年、妃殿下、財団法人癌研究会にラジウムをご寄附。</p>	<p>参内、雅仁親王同妃等と共にローマにおいて開催される日本美術展覧会出品作品をご覧。</p> <p>華族会館の英国女流画家エリザベス・キースの版画展をご覧。</p> <p>雅仁親王同妃と共に三越呉服店の仏蘭西工芸品展覧会をご覧。</p> <p>銀座資生堂の立体写真撮影所において写真撮影。</p> <p>今泉雄作の進講する「陶器その他美術品に就き」を聴聞される。同月18日まで3回継続。</p>	<p>No.12 (ロブ・デフルエ、No.13 《照一等宝冠章》、No.14 《黒地乱菊模様振袖》、No.15 《赤ンボニール》、No.16 《高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖》、No.17 《御成婚記念メダル》、No.18 《スキーヤー形文鎮》)</p> <p>No.53 《紅カットガラス洗面用器》、No.54 《色ガラス香水入》 関連作品は49頁を参照。</p> <p>No.35 《ボン・ボニール》</p>
昭和8年 (一九三三)	28	22	<p>4月21日 鹿島丸にて横浜港を出帆、ご外遊の途に就かれる。(ご外遊日程の詳細は49頁を参照)</p> <p>6月11日 横浜に入港。ご帰国。</p> <p>7月6日</p> <p>9月23日 日丁協会総裁にご就任。</p> <p>10月25日</p> <p>10月31日</p> <p>12月7日 横須賀海軍砲術学校ご通学。</p> <p>12月12日 高松宮新邸落成。</p> <p>12月19日 高輪御料地内仮御殿より同地内新邸に移居される。</p> <p>12月19日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>6月30日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>10月4日 華族会館名誉会員となられる。</p> <p>11月6日</p> <p>11月29日 海軍砲術学校高等科ご卒業。</p> <p>12月1日 軍艦「高雄」分隊長に補せられる。</p> <p>12月9日 日伯中央協会総裁にご就任。</p> <p>3月1日</p> <p>4月25日 徳川實枝子様逝去。</p> <p>7月30日</p> <p>11月20日 呉の軍艦「扶桑」にご着任。</p> <p>12月2日 呉市金谷氏別荘からご通勤。</p> <p>12月27日 神奈川県箱根元宮ノ下御用邸をご取得。</p> <p>1月5日 東京市に麻布区盛岡町及び広尾町所有御用地二万九百八十八坪二合をご下賜(現有栖川宮記念公園)。</p> <p>5月24日 国際文化振興会総裁にご就任。</p> <p>5月31日 有栖川宮記念として東京府に麻布区盛岡町御用地五千八百八十二坪をご下賜。</p> <p>6月3日</p> <p>7月7日</p> <p>11月10日 海軍大学校ご入学。</p> <p>11月18日 開園した有栖川宮記念公園をご巡覧。</p> <p>この年、妃殿下、財団法人癌研究会にラジウムをご寄附。</p>	<p>参内、雅仁親王同妃等と共にローマにおいて開催される日本美術展覧会出品作品をご覧。</p> <p>華族会館の英国女流画家エリザベス・キースの版画展をご覧。</p> <p>雅仁親王同妃と共に三越呉服店の仏蘭西工芸品展覧会をご覧。</p> <p>銀座資生堂の立体写真撮影所において写真撮影。</p> <p>今泉雄作の進講する「陶器その他美術品に就き」を聴聞される。同月18日まで3回継続。</p>	<p>No.12 (ロブ・デフルエ、No.13 《照一等宝冠章》、No.14 《黒地乱菊模様振袖》、No.15 《赤ンボニール》、No.16 《高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖》、No.17 《御成婚記念メダル》、No.18 《スキーヤー形文鎮》)</p> <p>No.53 《紅カットガラス洗面用器》、No.54 《色ガラス香水入》 関連作品は49頁を参照。</p> <p>No.35 《ボン・ボニール》</p>
昭和9年 (一九三四)	29	23	<p>4月21日 鹿島丸にて横浜港を出帆、ご外遊の途に就かれる。(ご外遊日程の詳細は49頁を参照)</p> <p>6月11日 横浜に入港。ご帰国。</p> <p>7月6日</p> <p>9月23日 日丁協会総裁にご就任。</p> <p>10月25日</p> <p>10月31日</p> <p>12月7日 横須賀海軍砲術学校ご通学。</p> <p>12月12日 高松宮新邸落成。</p> <p>12月19日 高輪御料地内仮御殿より同地内新邸に移居される。</p> <p>12月19日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>6月30日 図書寮編修官芝葛盛等の説明により、有栖川宮歴世行実編纂のため蒐集の行実関係資料を閲覧される。</p> <p>10月4日 華族会館名誉会員となられる。</p> <p>11月6日</p> <p>11月29日 海軍砲術学校高等科ご卒業。</p> <p>12月1日 軍艦「高雄」分隊長に補せられる。</p> <p>12月9日 日伯中央協会総裁にご就任。</p> <p>3月1日</p> <p>4月25日 徳川實枝子様逝去。</p> <p>7月30日</p> <p>11月20日 呉の軍艦「扶桑」にご着任。</p> <p>12月2日 呉市金谷氏別荘からご通勤。</p> <p>12月27日 神奈川県箱根元宮ノ下御用邸をご取得。</p> <p>1月5日 東京市に麻布区盛岡町及び広尾町所有御用地二万九百八十八坪二合をご下賜(現有栖川宮記念公園)。</p> <p>5月24日 国際文化振興会総裁にご就任。</p> <p>5月31日 有栖川宮記念として東京府に麻布区盛岡町御用地五千八百八十二坪をご下賜。</p> <p>6月3日</p> <p>7月7日</p> <p>11月10日 海軍大学校ご入学。</p> <p>11月18日 開園した有栖川宮記念公園をご巡覧。</p> <p>この年、妃殿下、財団法人癌研究会にラジウムをご寄附。</p>	<p>参内、雅仁親王同妃等と共にローマにおいて開催される日本美術展覧会出品作品をご覧。</p> <p>華族会館の英国女流画家エリザベス・キースの版画展をご覧。</p> <p>雅仁親王同妃と共に三越呉服店の仏蘭西工芸品展覧会をご覧。</p> <p>銀座資生堂の立体写真撮影所において写真撮影。</p> <p>今泉雄作の進講する「陶器その他美術品に就き」を聴聞される。同月18日まで3回継続。</p>	<p>No.12 (ロブ・デフルエ、No.13 《照一等宝冠章》、No.14 《黒地乱菊模様振袖》、No.15 《赤ンボニール》、No.16 《高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖》、No.17 《御成婚記念メダル》、No.18 《スキーヤー形文鎮》)</p> <p>No.53 《紅カットガラス洗面用器》、No.54 《色ガラス香水入》 関連作品は49頁を参照。</p> <p>No.35 《ボン・ボニール》</p>

昭和10年 (一九三〇)	30	24	4月21日 4月30日 11月15日 11月16日 海軍少佐にご進級。	雍仁親王同妃と共に東京府美術館の現代総合美術展覧会をご覧。 東京府美術館の国宝重要美術展覧会をご覧。
昭和11年 (一九三六)	31	25	2月4日 4月30日 7月8日 11月17日 11月26日 12月1日 12月1日 2月1日 4月12日 4月26日 4月30日 7月26日 11月20日 12月1日 12月1日 5月22日 7月26日 9月24日 4月12日 4月16日 4月25日 7月13日 10月22日 10月3日 11月3日 11月15日 11月15日 5月6日 6月6日 6月10日 7月3日 11月11日 11月15日 11月15日 7月7日 8月19日 9月9日 9月22日 9月27日 10月31日 11月20日 5月24日 5月26日 5月29日 9月10日 10月7日 10月12日 10月14日 11月1日	海軍大佐にご進級。 海軍大学ご卒業。 社団法人帝国発明協会総裁にご就任。 軍令部出仕兼部員に補せられ、第一部第三課にご着任。 軍令部第二第四課にご勤務。 軍令部第二第四課より第二部にご転勤。 軍令部第三部より第四部にご転勤。 大本営設置、大本営海軍参謀兼海軍通信部部長となられる。 軍令部部員に転補される。大本営海軍通信部部員を免ぜられ、大本営海軍参謀兼任となられる。 軍令部第一課に着任される。 東京府立美術館の戦争美術展覧会をご覧。 東京日日新聞社より吉島松之助筆「開北炎上油絵」を献上。 日本美術協会の大独逸展覧会をご覧。 東京府立美術館のフアシスト伊太利展覧会をご覧。 東京科学博物館のハンガリー展覧会、日本美術協会・帝室博物館をご巡覧。 高島屋の紀元二千六百年奉讃展覧会をご覧。 上野帝室博物館に刀剣・絵画・陶器類をご覧。 京都美術館の紀元二千六百年記念「皇室と京都」特別展をご覧。 民芸館をご覧。 満洲国皇帝をご訪問、皇太后より皇帝への御贈進品を伝献される。 三越本店の国際文化協会主催仏印巡回日本画展覧会をご覧。 三越本店の仏印巡回油絵展覧会をご覧。 三越本店の国際文化協会主催仏印巡回日本画展覧会をご覧。 沼津御用邸にて皇太后の午餐に陪席、御渡満につき花瓶等をご拝領。 宮廷に満洲国皇帝を御訪問、皇帝主催の午餐に御臨席、天皇・皇后・皇太后よりの御贈進品を伝献される。 上野帝室博物館表慶館の満洲国建国十周年慶祝会並びに同博物館主催満洲国国宝展覧会にご臨場。 帝室博物館の満洲国建国十周年慶祝帝國芸術院会員絵画展覧会にご臨場。 根津美術館をご覧。 文部省宗教局長阿原謙蔵・同保存課長青戸精一の進講する「戦時下一於ル古美術ノ保存(銅鐵回収・防空対策)」を聴聞される。 上野池ノ端のレオナルド・ダ・ヴィンチ展をご覧。
昭和14年 (一九三九)	34	28	ブラジル国大統領より南十字星大綬章を受領される。	
昭和15年 (一九四〇)	35	29	軍艦「利根」砲術長転補予定のところ病気のため軍令部出仕に転補される。 紀元二千六百年記念全国社会事業大会総裁にご就任。 軍艦「比叡」の砲術長に転補せられる。 宮城二重橋前広場の紀元二千六百年奉祝会に総裁(秩父宮代理として)臨場、奉祝詞を奏上。 有栖川宮歴世行実編修終了につき、顧問杉栄三郎・渡部信、編修芝葛盛・布施秀治・武田勝蔵等を召しにご晩餐。 日伊協会総裁にご就任。	
昭和16年 (一九四一)	36	30	横須賀航空隊研究部兵術班主任となられる。 明治神宮外苑の第12回明治神宮国民体育大会開会式に総裁として臨場。 軍令部部員に転補、大本営海軍参謀仰せ付けられる。 満洲国建国十周年にあたり同国に御差遣のため、羽田発、6月3日まで。	
昭和17年 (一九四二)	37	31		

昭和18年 (一九四三)	38	32	6月6日		三越の国際文化振興会主催印現代美術展覧会を、覧。
昭和19年 (一九四四)	39	33	8月21日		
昭和20年 (一九四五)	40	34	1月26日		京都にて陽明文庫を、見学。
			1月31日		
			6月25日		
			7月21日		
			7月31日		
			8月15日		
			8月21日		
			8月25日		
			10月15日		
			11月30日		
			12月22日		
昭和21年 (一九四六)	41	35	2月9日		東郷青児のアトリエ織物工場を視察される。
			5月23日		水交社より威仁親王肖像を献上される。
			7月4日		
			9月9日		東京府美術館の商工省展覧会に、臨場。
			7月4日		
			3月18日		東京都美術館の泰西名画展覧会に、臨場。
昭和22年 (一九四七)	42	36	3月18日		
昭和23年 (一九四八)	43	37	7月31日		
昭和24年 (一九四九)	44	38	2月9日		
			11月2日		
昭和26年 (一九五一)	46	40	2月6日		法隆寺金堂壁画採取作業を、視察。
			4月15日		
			4月		
			5月17日		
			10月9日		
			10月15日		
昭和27年 (一九五二)	47	41	7月23日		貞明皇后の御遺品を、拝領、11月1日にも此の事あり。
			9月13日		
			9月25日		
			10月3日		
			10月15日		
			10月28日		
昭和28年 (一九五三)	48	42	12月18日		奈良国立博物館に正倉院御物展を、覧。
			1月4日		
			12月23日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		
			12月18日		
			12月23日		
			1月4日		
			3月24日		

昭和34年 (一九五九)	54	48	10月14日	国立西洋美術館の開館式に臨場。	
昭和35年 (一九六〇)	55	49	8月21日	ハワイ日本移民75周年式典参列並びに国際親善のため、米国ハワイ州をご訪問。26日に ご帰国。	
昭和36年 (一九六一)	56	50	9月17日	貞明皇后御集の外題・内題をご染筆。	
昭和39年 (一九六四)	59	53	10月10日	国立競技場の第18回オリンピック東京大会開会式にご臨場。	
昭和40年 (一九六五)	60	54	10月24日	国立競技場のオリンピック東京大会閉会式にご臨場。	
昭和41年 (一九六六)	61	55	1月3日	還暦を迎えられる。	
昭和42年 (一九六七)	62	56	2月4日	ご成婚35周年記念日(翡翠婚)を迎えられる。	
昭和43年 (一九六八)	63	57	9月	米加巡回日本古美術展名譽総裁にご就任。	
昭和44年 (一九六九)	64	58	10月6日	ルオー遺作展名譽総裁にご就任。	
昭和45年 (一九七〇)	65	59	10月25日	ロダン展名譽総裁にご就任。	
昭和46年 (一九七一)	66	60	12月5日	ミロ展総裁にご就任。	
昭和47年 (一九七二)	67	61	4月5日	ポンペイ古代美術展名譽総裁にご就任。	
昭和48年 (一九七三)	68	62	4月7日	ボナール展名譽総裁にご就任。	
			4月20日	モジリアニ名作展名譽総裁にご就任。	
			4月21日	加藤土師萌遺作展にご臨場。	
			8月22日	ロートレック展名譽総裁にご就任。	
			8月28日	来日したデンマーク国ハルトリング外相より日丁協会総裁就任40年記念として 銀製盛器を献上。	
			8月28日	ゴッギャン展名譽総裁にご就任。	
			8月28日	8月30日、チューリッヒ美術館の日本古美術展開会式にご臨場。	
			8月28日	スイス国へご旅行。9月6日ご帰国。	
			2月16日	日本ベルギー協会名譽総裁にご就任。	
			4月10日	日本万国博覧会をご視察。5月7日も再訪される。	
			5月1日	旧王族李垠氏の葬儀参列のため、韓国をご訪問。9日ご帰国。	
			8月15日	スペイン美術展名譽総裁にご就任。	
			10月5日	ミレー展名譽総裁にご就任。	
			10月15日	大ヴェルサイユ展名譽総裁にご就任。	
			11月15日	ホルダー美術館名作展名譽総裁にご就任。	
			11月16日	ルノワール展名譽総裁にご就任。	
			11月17日	ベルギー国アルベル親王に漆器製金時絵貫箱をご贈進。	
			11月18日	ゴヤ展名譽総裁にご就任。	
			11月19日	浮世絵展の名譽総裁にご就任。	
			11月20日	レジエ展名譽総裁にご就任。	
			11月21日	ペーテルブリューゲル版画展名譽総裁にご就任。	
			11月22日	メトロポリタン美術館展名譽総裁にご就任。	
			11月23日	ジェームス・アンソール展名譽総裁にご就任。	
			11月24日	モネ展名譽総裁にご就任。	
			11月25日	サンパウロ美術展名譽総裁にご就任。	
			11月26日	ジャコモメッティ展名譽総裁にご就任。	
			11月27日	イタリア・ルネサンス・ヴェネツィア派名作展名譽総裁にご就任。	
			11月28日		
			11月29日		
			11月30日		
			12月1日		
			12月2日		
			12月3日		
			12月4日		
			12月5日		
			12月6日		
			12月7日		
			12月8日		
			12月9日		
			12月10日		
			12月11日		
			12月12日		
			12月13日		
			12月14日		
			12月15日		
			12月16日		
			12月17日		
			12月18日		
			12月19日		
			12月20日		
			12月21日		
			12月22日		
			12月23日		
			12月24日		
			12月25日		
			12月26日		
			12月27日		
			12月28日		
			12月29日		
			12月30日		
			1月1日		
			1月2日		
			1月3日		
			1月4日		
			1月5日		
			1月6日		
			1月7日		
			1月8日		
			1月9日		
			1月10日		
			1月11日		
			1月12日		
			1月13日		
			1月14日		
			1月15日		
			1月16日		
			1月17日		
			1月18日		
			1月19日		
			1月20日		
			1月21日		
			1月22日		
			1月23日		
			1月24日		
			1月25日		
			1月26日		
			1月27日		
			1月28日		
			1月29日		
			1月30日		
			1月31日		
			2月1日		
			2月2日		
			2月3日		
			2月4日		
			2月5日		
			2月6日		
			2月7日		
			2月8日		
			2月9日		
			2月10日		
			2月11日		
			2月12日		
			2月13日		
			2月14日		
			2月15日		
			2月16日		
			2月17日		
			2月18日		
			2月19日		
			2月20日		
			2月21日		
			2月22日		
			2月23日		
			2月24日		
			2月25日		
			2月26日		
			2月27日		
			2月28日		
			2月29日		
			3月1日		
			3月2日		
			3月3日		
			3月4日		
			3月5日		
			3月6日		
			3月7日		
			3月8日		
			3月9日		
			3月10日		
			3月11日		
			3月12日		
			3月13日		
			3月14日		
			3月15日		
			3月16日		
			3月17日		
			3月18日		
			3月19日		
			3月20日		
			3月21日		
			3月22日		
			3月23日		
			3月24日		
			3月25日		
			3月26日		
			3月27日		
			3月28日		
			3月29日		
			3月30日		
			3月31日		
			4月1日		
			4月2日		
			4月3日		
			4月4日		
			4月5日		
			4月6日		
			4月7日		
			4月8日		
			4月9日		
			4月10日		
			4月11日		
			4月12日		
			4月13日		
			4月14日		
			4月15日		
			4月16日		
			4月17日		
			4月18日		
			4月19日		
			4月20日		
			4月21日		
			4月22日		
			4月23日		
			4月24日		
			4月25日		
			4月26日		
			4月27日		
			4月28日		
			4月29日		
			4月30日		
			5月1日		
			5月2日		
			5月3日		
			5月4日		
			5月5日		
			5月6日		
			5月7日		
			5月8日		
			5月9日		
			5月10日		
			5月11日		
			5月12日		
			5月13日		
			5月14日		
			5月15日		
			5月16日		
			5月17日		
			5月18日		
			5月19日		
			5月20日		
			5月21日		
			5月22日		
			5月23日		
			5月24日		
			5月25日		
			5月26日		
			5月27日		
			5月28日		
			5月29日		
			5月30日		
			5月31日		
			6月1日		
			6月2日		
			6月3日		
			6月4日		
			6月5日		
			6月6日		
			6月7日		
			6月8日		
			6月9日		
			6月10日		
			6月11日		
			6月12日		
			6月13日		
			6月14日		
			6月15日		
			6月16日		
			6月17日		
			6月18日		
			6月19日		
			6月20日		
			6月21日		
			6月22日		
			6月23日		
			6月24日		
			6月25日		
			6月26日		
			6月27日		
			6月28日		
			6月29日		
			6月30日		
			7月1日		
			7月2日		
			7月3日		
			7月4日		
			7月5日		
			7月6日		
			7月7日		
			7月8日		
			7月9日		
			7月10日		
			7月11日		
			7月12日		
			7月13日		
			7月14日		
			7月15日		
</					

昭和49年 (一九七四)	69	3月29日	セザンヌ展名譽総裁にご就任。
昭和50年 (一九七五)	70	7月24日	印象派百年展名譽総裁にご就任。
昭和51年 (一九七六)	71	8月15日	マクスと野獸派展名譽総裁にご就任。
	64	4月3日	キスリング展名譽総裁にご就任。
	65	8月29日	トレチャコフ・プーシキン美術展名譽総裁にご就任。
	66	9月19日	ハマコレクション展名譽総裁にご就任。
昭和52年 (一九七七)	72	4月22日	日本刀里帰り展名譽総裁にご就任。
昭和53年 (一九七八)	73	4月7日	二十世紀絵画の流れ「抽象と幻想の世界」展名譽総裁にご就任。
	67	5月20日	シヤガール展名譽総裁にご就任。
	68	8月20日	ドガ展名譽総裁にご就任。
昭和54年 (一九七九)	74	9月22日	コートダジュール南仏美術館めぐり展名譽総裁にご就任。
	69	10月8日	ミレー・コロ・クールべ展「バルビゾン派の巨匠たち」名譽総裁にご就任。
昭和55年 (一九八〇)	75	10月14日	ヴェイヤール展名譽総裁にご就任。
昭和56年 (一九八一)	76	8月26日	ピカソ展名譽総裁にご就任。
昭和57年 (一九八二)	77	4月24日	ボストン美術館名譽総裁にご就任。
	70	9月26日	日本工芸会副理事長森口華弘以下二名同会二十五周年記念品献上のため参邸。
	71	10月5日	ユトリロ展名譽総裁にご就任。
	72	7月27日	ボストン美術館秘蔵展「フランス絵画の巨匠たち」名譽総裁にご就任。
昭和58年 (一九八三)	78	9月6日	マリ・ローランサン展名譽総裁にご就任。
昭和59年 (一九八四)	79	9月13日	モディリアニ展名譽総裁にご就任。
昭和60年 (一九八五)	80	9月25日	ルノワール展名譽総裁にご就任。
	81	2月4日	イヴ・ブライエル展名譽総裁にご就任。
昭和61年 (一九八六)	82	4月20日	ミレーの晩鐘と十九世紀フランス絵画名作展名譽総裁にご就任。
昭和62年 (一九八七)	83	4月20日	ブラマンク展名譽総裁にご就任。
	76	5月	エルミタージュ美術館所蔵レンブラント展名譽総裁にご就任。
	75	9月10日	モネ展名譽総裁にご就任。
	74	10月8日	フランス近世名画展名譽総裁にご就任。
	73	7月7日	印象派と栄光の名画展名譽総裁にご就任。
	72	8月25日	ティツェンコレクション名作展「近代絵画の展開」名譽総裁にご就任。
	73	5月18日	パリと哀愁のロマン マリー・ローランサン展名譽総裁にご就任。
	74	7月10日	クリムトとエゴン・シーレ展名譽総裁にご就任。
	75	10月10日	ルーベンス展名譽総裁にご就任。
	76	4月5日	茶の湯五百年の造形展にご臨場。
	77	10月10日	高松宮家より約千八百点の文化財が文化庁へ寄贈される。
	78	10月22日	
	79	10月22日	
	80	11月6日	
	81	7月21日	
	82	10月22日	
	83	11月23日	
	84	1月23日	
	85	1月27日	
	86	2月3日	
	87	9月	
	88	1月7日	
	89	11月12日	
	90	11月12日	
	91	6月	
	92	11月	
	93	6月	
	94	12月18日	
	95	10月	

主な参考文献

【御写真集】

- ・「高松宮宣仁親王」刊行委員会『高松宮宣仁親王』、朝日新聞社、昭和六十三年
- ・「高松宮宣仁親王殿下」特別写真集刊行委員会『特別写真集 高松宮宣仁親王殿下』、毎日新聞社、昭和六十三年
- ・高松宮妃傘寿記念刊行委員会『菊に華あり』、主婦の友社、平成六年

【単行本】

- ・『高松宮同妃両殿下御外遊日誌』、高松宮蔵版、昭和十年
- ・小川勝次『高松宮殿下のスキー随日記』、金沢文庫、昭和五十年
- ・『高松宮宣仁親王殿下をお偲びして―藤楓協会三十五年の歩み―』、財団法人藤楓協会、昭和六十三年
- ・「高松宮宣仁親王」伝記刊行委員会『高松宮宣仁親王』、朝日新聞社、平成三年
- ・『高松宮日記』全八巻、中央公論社、平成七～九年
- ・阿川弘之『高松宮と海軍』、中央公論社、平成八年
- ・高松宮妃喜久子『菊と葵のものがたり』、中央公論社、平成十年
- ・高松宮宣仁親王『うひまなび 高松宮宣仁親王歌集』、中央公論事業出版、平成十二年
- ・平野久美子『高松宮同妃両殿下のグランド・ハネムーン』、中央公論新社、平成十六年
- ・岩崎藤子『九十六年なんて、あつと言う間でございます―高松宮宣仁親王妃喜久子殿下との思い出―』、雄山閣、平成二十年
- ・榊原喜佐子『大宮様と妃殿下のお手紙―古きよき貞明皇后の時代』、草思社、平成二十二年

【展覧会図録】

- ・『有栖川・高松宮ゆかりの名品展』、財団法人日本美術協会、平成七年
- ・『三峰窯の思い出―宮様とやきもの』、宮内庁、平成二十一年
- ・『宮廷の雅―有栖川宮家から高松宮家へ―』、中部日本放送株式会社、平成二十三年

【その他】

- ・『宣仁親王略御年譜』一～九

出品目録

平成二十五年三月二十六日(火)～七月十五日(月・祝)
 第1期…三月二十六日(火)～五月六日(月・祝)
 第2期…五月十一日(土)～六月九日(日)
 第3期…六月十五日(土)～七月十五日(月・祝)

作品番号	作品名	作者	員数	制作時期	材質技法	寸法	展示期間
両殿下の御肖像							
1	殿下御肖像	三木辰夫	一面	昭和三十一年(一九五六)	紙、インク、水彩	本紙二四・八×一九・五	
2	殿下御頭像	ハンス・ヨルク・リンバック	一点	昭和三十一年(一九五六)	ブロンズ	三五・八×三三・二×三八・二	全期
3	妃殿下御肖像	ローズマリー・コイル	一面	一九五〇年代	カンヴァス、油彩	本紙七三・八×四二・〇	
4	妃殿下博多人形	西頭哲三郎(初代)	一点	昭和五十六年(一九八一)	素焼、彩色	総一七・八×一七・八×四三・七	
宣仁親王殿下 ご誕生からご成年まで							
2	御命名書	明治天皇	二枚	明治三十八年(一九〇五)	紙本墨書	各二六・八×六七・〇	第1・2期
3	犬張子		一对	明治三十八年(一九〇五)	紙胎、胡粉地、銀彩	(右)一八・〇×三二・五×二〇・八、 (左)一八・七×三〇・八×二二・〇	第1期
4	檜兜		一点	明治三十八年(一九〇五)	木製彩色	一三・〇×三六・〇×七三・〇	第2期
5	天盃		一点	明治三十八年(一九〇五)	陶磁	径二二・五、高四・二	第2期
6	青漆塗御菓子文庫		一合	明治末期(二十世紀初頭)	一閑張、漆塗	二六・九×二四・〇×二〇・五	第3期
7	示高松宮	大正天皇	一卷	大正二年(一九一三)頃	絹本墨書	本紙三七・二×六二・一	第3期
8	殿下御染筆御扇子	宣仁親王殿下	一点	大正三年(一九一四)	木製、紙本墨書	骨長二七・七	第3期
9	高松宮御成年奉祝詠進歌色紙帖		一帖	昭和十一年(一九三六)	紙本墨書	本紙各二二・×一八・〇	第3期
10	大勲位菊花大綬章(殿下御佩用)		一組	大正十四年(一九二五)		径六・四、高二・六	全期
11	1 ポンボニエール 丸形梅花散文 2 ポンボニエール 箱形梅花散文		一点 一点	大正十四年(一九二五)	銀製	五・二×三・九×二・〇	全期
(ご成婚とご外遊)							
12	ローブ・デコレテ		一点	昭和五年(一九三〇)	象牙色織地、ビーズ装飾	肩巾三四・〇、総丈二七七・〇	第1期
13	勲一等宝冠章(妃殿下御佩用)		一組	昭和五年(一九三〇)			全期
14	黒地乱菊模様振袖		一点	昭和五年(一九三〇)頃	縮緬地、友禅染、刺繍	拵六二・五、身丈二六〇・七	第2期
15	1 ポンボニエール 洲浜形松波文 2 ポンボニエール 櫃形		一点 一点	昭和五年(一九三〇)	銀製	三・九五×六二・一×一・八 六・四五×六二・五×三・九	全期
16	高松宮御成婚奉祝詠進歌色紙帖		一帖	昭和十二年(一九三七)	紙本墨書	本紙各二二・×一八・〇	第3期
17	御成婚記念メダル	大蔵省造幣局	一点	昭和五年(一九三〇)	白銅、鑄造	径六・〇	第2期
18	スキーヤー形文鎮	朝倉文夫	一点	昭和五年(一九三〇)	白銅、鑄造	一〇・五×四五・〇×一六・〇	第2期
19	納戸地虞美人草模様振袖		一点	昭和五年(一九三〇)頃	縮緬地、友禅染、刺繍	拵六四・〇、身丈二六二・八	第2期
20	紫地牡丹に檜扇模様振袖		一点	昭和五年(一九三〇)頃	縮緬地、友禅染、刺繍	拵六三・〇、身丈二六〇・〇	第3期
21	黒地梅に鳩模様振袖		一点	昭和五年(一九三〇)頃	縮緬地、友禅染、刺繍	拵六二・五、身丈二六〇・二	第3期
22	象牙菊花蒔絵扇子		一点	昭和前期(二十世紀前半)	象牙、蒔絵	骨長二六・〇	第2期

23		松に鶴図扇子	一点	昭和五年(一九三〇)頃	象牙、蒔絵、絹本着色	骨長二四・五	第3期
24		御旅行用象牙御化粧セット	一式	二十世紀	象牙、ガラス	ブラシ(大)一四・五×八・五×五・〇ほか	第1期
25		御旅行用鼈甲御化粧セット	一式	昭和五年(一九三〇)頃	鼈甲、ガラス、皮革	ケース二九・五×四七・〇×一一・三	第1期
26	1	ヴィクトリア大綬章(殿下御佩用)	一組	一九三〇年			第1期
	2	レジョン・ドヌール大綬章(殿下御佩用)	一組	一九三〇年			第1期
27		大礼服トレーン	一点	一九三〇年頃	象牙色織地、ビーズ装飾	裾中一一・〇・五、全長三一・〇・〇	第1期
28		羽扇子	一点	一九三〇年頃	ダチョウ羽、象牙	骨長二二・六	第1期
29		妃殿下御肖像	一面	一九三〇年	写真、着色	本紙三五・二×二六・八	第1期
30		薔薇模様ボレロ	一点	一九三〇年頃	スパンコール、ビーズ	身丈五六・〇、裾中四八・〇	第1期
31		ハンドバッグ	一点	一九三〇年頃	革、金、ラピスラズリ、エマイユ	一六・七×一四・五×二・四	第1期
32		白磁植物文花瓶	一点	一九三〇年	陶磁	径四一・〇、高七二・〇	第1期
33		海洋生物文噴水電燈	一点	一九三〇年	陶磁	径三一・二、高八〇・〇	第1期
34		ムラーノ・グラス花瓶	一点	一九三〇年頃	ガラス	径二七・〇、高四二・五	第1期
35	1	ボンボニエール 柄鏡箱形すみれ文	一点	昭和六年(一九三二)	銀製	八・×五・八×一四・五	全期
	2	ボンボニエール 地球儀形	一点			径五・七、高一・〇	
お二人の日々							
36		大三島図	一面	昭和七年(一九三二)	紙本着色	本紙二三・五×一八・〇・〇	第2期
37		和歌懐紙	一幅	大正十五年(一九二六)	紙本墨書	本紙四四・九×五九・六	第3期
38		偉勲不績	一幅	昭和四年(一九二九)	紙本墨書	本紙二六・五×三七・六	第3期
39		和歌懐紙	一幅	昭和九年(一九三四)	紙本墨書	本紙二九・五×三七・九	第3期
40	1	宮家御紋散蒔絵文箱	一合	昭和十七年(一九四二)	木製漆塗、蒔絵	二二・二×一一・三・五×五・〇	第3期
	2	若梅撫子文蒔絵文箱	一合			二二・二×一一・三・五×五・〇	
41		むつの御旅	一帖	昭和二十四年(一九四九)	紙本墨画淡彩	本紙(第一図)二九・三×二五・〇、(第二図以降)各三・九×四四・五	第3期
42		第十一回国体明石庭球大会	一面	昭和三十一年(一九五六)	木版画	本紙五六・〇×六八・八	第3期
	1	菖蒲	一面	昭和十年(一九三五)頃	紙本着色	本紙三六・一×五〇・〇	第2期
	2	吹上御所にて	一面	昭和三十七年(一九六二)	紙、鉛筆、水彩	本紙三六・五×四六・六	第2期
	3	富士乃図	一幅	昭和四十五年(一九七〇)	紙本墨画	本紙三一・四×三六・一	第2期
43		喜久子妃殿下	一幅	昭和四十五年(一九七〇)	紙本墨画		第2期
	1	三峰窯 志野風茶碗 銘 梅花	一点	昭和三十三年(一九五八)		径一一・三、高七・八	第2期
	2	三峰窯 飴釉茶碗 銘 山里	一点	昭和三十八年(一九六三)		径一〇・五、高八・六	第2期
	3	三峰窯 瑠璃釉茶碗 銘 老松	一点	昭和四十年(一九六五)		径一一・〇、高一〇・〇	第2期
	4	三峰窯 伊羅保茶碗 銘 夏乃夜	一点	昭和四十九年(一九七四)	陶磁	径一六・〇、高六・七	第2期
	5	三峰窯 白磁紅葉文花瓶	一点	昭和四十二年(一九六七)		径一一・五、高九・八	第2期
	6	三峰窯 鉄絵灰釉雀置物	一点	昭和四十九年(一九七四)		五・五×九・四×五・二	第2期
	7	三峰窯 俎皿 銘 橋姫、江南	六点	昭和五十一年(一九七六)		各三・三×六・五×七・五	第2期

45	1 三峰窯 湯茶碗	一点	昭和二十六年(一九五二)	陶磁	径一〇・高七〇	第1期
	2 三峰窯 鉄絵貝香合	一点	昭和三十八年(一九六三)	陶磁	五・五×五・八×三・三	第2期
	3 三峰窯 瑠璃釉陶硯	一点	昭和四十年(一九六五)		一〇・一×九・〇×二・〇	
46	1 ボンボンニエール 菊花形双鶴若梅撫子文	一点	昭和三十年(一九五五)	銀製	径四・九・高二一	全期
	2 ボンボンニエール 丸形若梅に撫子文	一点	昭和五十五年(一九八〇)		径六・〇五・高三三・五	
受け継がれた品々						
47	修学院焼ふくべ形香炉	一点	江戸中期(十八世紀前半)	陶磁	径一八・〇・高一七・五	第1期
48	瓢形丁子風炉	一点	江戸後期(十八世紀)	風炉・銀製、 台・木製蒔絵	風炉二四・三×二五・五×三〇・〇、 蒔絵台二九・五×二九・五×六・三	第2期
49	歌蒔絵重視箱	一具	江戸後期 (十八〜十九世紀)	木製漆塗、蒔絵	総二四・五×二二・五×一七・五	第3期
	有栖川御流筆	十本	江戸末期〜明治期 (十九世紀〜二十世紀初頭)			
1	和筆 無銘			穂・羊毛、軸・ケヤキ	長六二・〇	
2	和筆 [筆籠]			穂・山馬毛、 軸・紫竹、黒塗藤卷金具付	長六一・〇	
3	和筆 無銘			穂・山羊毛、軸・竹	長五九・〇	
4	和筆 無銘			穂・鹿毛、軸・木、朱漆塗 金泥絵、藤卷	長三六・四	
5	和筆 [筆籠]			穂・鹿毛と馬毛の混合、 軸・斑竹、黒塗藤卷金具付	長一九・〇	第3期
6	和筆 [筆籠]			穂・鹿毛、 軸・紫竹、黒塗藤卷金具付	長三三・五	
7	和筆 [筆籠]			穂・鹿毛、 軸・紫竹、黒塗藤卷金具付	長三二・五	
8	唐筆			穂・羊もしくは山羊毛、 軸・紫檀	長二七・四	
9	唐筆			穂・馬毛、軸・紫檀	長二四・七	
10	唐筆			穂・羊毛、軸・斑竹	長三〇・四	
51	色絵四季草花図食器	一式のうち	明治前期(十九世紀)	陶磁	鉢(込)径三四・〇・高一八・〇ほか	第2期
52	有栖川宮家御紋付花盛器	一点	十九世紀	銀製	四〇・〇×七二・〇×二〇・五	第1期
53	紅カットグラス洗面用器	一式	二十世紀	ガラス	水差一六・〇×三二・五×三三・二 ほか	第1期
54	色ガラス香水入	一式	二十世紀	ガラス	蓋付容器(大)径一〇・四、 高一二・二ほか	第1期
55	雍熙帖	一帖	明治三十三年(一九〇〇)	絹本着色	本紙各三二・一×四一・二	第3期
56	鶏の図	一面	明治〜大正期(二十世紀)	油彩、色紙	本紙二五・五×二二・七	第1期
57	御紋付七宝鶏に秋草図花瓶	一对	明治期(二十世紀初頭)	七宝	各径一八・六・高四二・三	第2期
58	宝玉七宝 鳳凰形香炉	一点	明治〜大正期(二十世紀)	七宝	九・〇×五八・〇×二二・五	第3期
59	菊に鶴蒔絵提重	一組	大正六年(一九一七)頃	木製漆塗、蒔絵	総一七・三×一八・三×二六・〇	第3期
60	藤花蒔絵提重	一組	大正七年(一九一八)頃	紫檀、蒔絵	総一五・〇×一五・〇×一九・七	第3期
61	赫夜姫昇天	一点	昭和二十八年(一九五三)	木彫胡粉塗、彩色	二一・〇×二六・〇×四二・〇	第3期

謝辞

本展覧会の開催に当たり、左記の機関や各氏にご協力いただきました。
（順不同、敬称略）

公益財団法人高松宮妃癌研究基金、駐日アイルランド大使館

伊藤史湖、井上芳子、佐藤進、杉本まゆ子、中村麗子

Aisling Braiden

若梅に撫子——旧高松宮家と伝来の品々

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 62

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十五年三月二十六日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

若梅に撫子——旧高松宮家と伝来の品々

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 62

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十五年三月二十六日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections

- 44-7
Manaita plates named “Hashihime, Konan”,
 made at Mitsumine-gama kiln
 Princess Kikuko
 1976
 ceramic
 each 33.0×6.5×7.5
- 45-1
 Tea bowl with whirl pattern, made at
 Mitsumine-gama kiln
 Kato Hajime
 1951
 ceramic
 d. 11.0, h. 7.0
- 45-2
 Shell shaped incense caddy, porcelain with
 iron painting, made at Mitsumine-gama kiln
 Kato Hajime
 1963
 ceramic
 5.5×5.8×3.3
- 45-3
 Ceramic inkstone with blue glaze, made at
 Mitsumine-gama kiln
 Kato Hajime
 1965
 ceramic
 10.1×9.0×2.0
- 46-1
 Bonbonnière, chrysanthemum shape with pair
 of cranes, young *ume*, and fringed pink designs
 1955
 silver
 d. 4.9, h. 2.2
- 46-2
 Bonbonnière, round shape with young *ume*
 and fringed pink designs
 1980
 silver
 d. 6.05, h. 3.35
-
- The items succeeded**
-
- 47
 Incense burner in *fukube* (bottle gourd seed)
 shape, Shugakuin ware
 early 18th c.
 ceramic
 d. 18.0, h. 17.5
- 48
 Incense burner in *choji-buro* (clove brewer)
 shape
 18th c.
 incense burner: silver, base: *makie* on wood
 burner 24.3×25.5×30.0, *makie* base 29.5×29.5×6.3
- 49
 Tiered inkstone boxes with poem designs in
makie
 18-19th c.
 lacquer and *makie* on wood
 total size 24.5×21.5×17.5
- 50
 Prince Arisugawa style brushes
 19-early 20th c.
- 50-1
 Japanese style brush, unnamed
 brush point:sheep hair, handle: zelkova
 l. 62.0
- 50-2
 Japanese style brush, named “Hitsuryo”
 brush point:*sanba* hair, handle: purple bamboo with
 metalpiece wound with black painted rattan
 l. 61.0
- 50-3
 Japanese style brush, unnamed
 brush point:goat hair, handle: bamboo
 l. 59.0
- 50-4
 Japanese style brush, unnamed
 brush point: deer hair, handle: wood, red lacquer
 with gold painting, wound with rattan
 l. 36.4
- 50-5
 Japanese style brush, named “Hitsuryo”
 brush point: mixture of deer and horse hair, handle:
 spotted bamboo with metalpiece wound with black
 painted rattan
 l. 29.0
- 50-6
 Japanese style brush, named “Hitsuryo”
 brush point: deer hair, handle: purple bamboo with
 metalpiece wound with black paint
 l. 33.5
- 50-7
 Japanese style brush, named “Hitsuryo”
 brush point: deer hair, handle: purple bamboo with
 metalpiece wound with black paint
 l. 31.5
- 50-8
 Chinese style brush
 brush point:sheep or goat hair, handle: red
 sandalwood
 l. 27.4
- 50-9
 Chinese style brush
 brush point:horse hair, handle: red sandalwood
 l. 24.7
- 50-10
 Chinese style brush
 brush point:sheep hair, handle: spotted bamboo
 l. 30.4
- 51
 Table ware with designs of grasses and
 flowers of the four seasons, in polychrome
 glaze
 Kanzan Denshichi
 19th c.
 ceramic
 bowl (large size) d. 34.0, h. 18.0, etc.
- 52
 Flower vessel with crest of the Prince
 Arisugawa Family
 Christofle
 19th c.
 silver
 40.0×72.0×20.5
- 53
 Red cut-glass washing basin
 Val Saint Lambert
 20th c.
 glass
 water jug 16.0×22.5×32.2, etc.
- 54
 Colored glass perfume bottle
 Moser Glassworks
 20th c.
 glass
 lidded container (large one) d. 10.4, h. 12.2, etc.
- 55
 Painting album named “Yokijo”
 Yamana Tsurayoshi and others
 1900
 color on silk
 area of painting each 32.1×41.2
- 56
 Rooster
 Kawamura Kiyo-o
 1900’s to 1920’s
 oil painting on *shikishi* paper
 area of painting 25.5×22.7
- 57
 Pair of *shippo* enamel vases with Imperial crest
 and designs of roosters and autumn grasses
 Namikawa Sosuke
 early 20th c.
shippo enamels
 each d. 18.6, h. 42.3
- 58
Hogyoku Shippo enameled incense burner in
 phoenix shape
 Kaji Sataro
 1900’s to 1920’s
shippo enamels
 9.0×58.0×21.5
- 59
 Handled tiered box with chrysanthemum and
 crane designs in *makie*
 c.1917
 lacquer and *makie* on wood
 total size 17.3×18.3×26.0
- 60
 Handled tiered box with wisteria design in
makie
 c.1918
makie on red sandalwood
 total size 15.0×15.0×19.7
- 61
 Kaguyahime ascending
 Noguchi Mitsuhiro
 1953
gofun and colors on carved wood
 21.0×26.0×42.0

- 25
Tortoise shell vanity set for traveling
c.1930
tortoise shell, glass, leather
case 29.5×47.0×11.3
- 26-1
Grand Cordon of Victoria (worn by the Prince)
1930
- 26-2
National Order of the Legion of Honour (worn by the Prince)
1930
- 27
Train for Enthronement Ceremony dress
c.1930
ivory white textile, bead decorations
trail end w. 110.5, total l. 310.0
- 28
Folding fan made with feathers
c.1930
goose feathers, ivory
bone length 21.6
- 29
Portrait of the Princess
Vandyk
1930
color on photograph
area of painting 35.2×26.8
- 30
Borelo with rose designs
c.1930
spangles, beads
body l. 56.0, bottom w. 48.0
- 31
Handbag
Garrard & Co Ltd
c.1930
leather, gold, lapis lazuli, enamel
16.7×14.5×2.4
- 32
White porcelain vase with plant design
Sèvres Manufacture Nationale France
1930
ceramic
d. 41.0, h.72.0
- 33
Water fountain lamp with marine organism designs
Sèvres Manufacture Nationale France
1930
ceramic, etc.
d. 31.2, h.80.0
- 34
Murano glass vase
M.V.M Cappellin
c.1930
glass
d. 27.0, h. 42.5
- 35-1
Bonbonnière, handled mirror shape with violet design
1931
silver
8.1×5.8×1.45
- 35-2
Bonbonnière, globe shape
1931
silver
d. 5.7, h. 11.0
-
- The days together
-
- 36
Omishima
Matsuoka Eikyu
1932
color on paper
area of painting 135.0×180.0
- 37
Waka poem on *kaishi* paper
Prince Nobuhito
1926
ink on paper
area of calligraphy 44.9×59.6
- 38
“Great meritorious deed”
Prince Nobuhito
1929
ink on paper
area of calligraphy 26.5×37.6
- 39
Waka poem on *kaishi* paper
Princess Kikuko
1934
ink on paper
area of calligraphy 29.5×37.9
- 40-1
Letter box with scattered crests of the Prince Takamatsu Family in *makie*
1942
lacquer and *makie* on wood
22.2×13.5×5.0
- 40-2
Letter box with young *ume* and fringed pink design in *makie*
1942
lacquer and *makie* on wood
22.2×13.5×5.0
- 41
Trip to Aomori Prefecture
Nakagawa Kigen
1949
ink and light colors on paper
area of painting (1st print) 29.3×25.0, (2nd print and others) each 32.9×44.5
- 42
11th National Athletic Meeting Tennis Tournament in Akashi
Kawanishi Hide
- 1956
woodblock print
area of painting 56.0×68.8
- 43-1
Iris
Princess Kikuko
c.1935
color on paper
area of painting 36.1×50.0
- 43-2
At Fukiage Palace
Princess Kikuko
1962
pencil and watercolors on paper
area of painting 36.5×46.6
- 43-3
Mt. Fuji
Princess Kikuko
1970
ink on paper
area of painting 31.4×36.1
- 44-1
Tea bowl in Shino style, named “Baika”, made at Mitsumine-gama kiln
Prince Nobuhito
1958
ceramic
d. 12.3, h. 7.8
- 44-2
Tea bowl with brown glaze, named “Yamazato”, made at Mitsumine-gama kiln
Prince Nobuhito
1963
ceramic
d. 10.5, h. 8.6
- 44-3
Tea bowl with blue glaze, named “Oimatsu”, made at Mitsumine-gama kiln
Prince Nobuhito
1965
ceramic
d. 12.0, h. 10.0
- 44-4
Tea bowl with Irabo glaze, named “Natsuno-yo”, made at Mitsumine-gama kiln
Prince Nobuhito
1974
ceramic
d. 16.0, h. 6.7
- 44-5
Vase with maple design with white glaze, made at Mitsumine-gama kiln
Princess Kikuko
1967
ceramic
d. 11.5, h. 9.8
- 44-6
Sparrow shaped incense caddy with ash glaze and iron painting, made at Mitsumine-gama kiln
Princess Kikuko
1974
ceramic
5.5×9.4×5.2

List of Exhibits

Portraits of Prince and Princess Takamatsu

1-1
Portrait of Prince Takamatsu
Miki Tatsuo
1956
ink and watercolors on paper
area of painting 24.8×19.5

1-2
Head of Prince Takamatsu
Hans Jörg Limbach
1956
bronze
35.8×32.2×38.2

1-3
Portrait of Princess Takamatsu
Rosemary Coyle
1950's
oil on canvas
area of painting 73.8×42.0

1-4
Princess Takamatsu (Hakata doll)
Nishito Tetsusaburo 1st
1981
color on unglazed pottery
total size 17.8×17.8×43.7

Prince Nobuhito, from birth to coming of age

2
Calligraphy of Naming the Prince
Emperor Meiji
1905
ink on paper
each 26.8×67.0

3
Pair of papier-mâché dogs
1905
silver paint, *gofun* ground, on paper mache body
(right) 18.0×31.5×20.8, (left) 18.7×30.8×21.0

4
Cypress helmet
1905
color on wood
23.0×36.0×73.0

5
Wine cup received from the Emperor on the first palace visit
1905
ceramic
d. 12.5, h.4.1

6
Blue lacquered confectionary box
early 20th c.
lacquer on paper
26.9×24.0×10.5

7
Poem presented to Prince Takamatsu
Emperor Taisho
c.1913
ink on silk
area of calligraphy 37.2×62.1

8
Folding fan with *waka* poem written by the Prince
Prince Nobuhito
1914
wood, ink on paper
bone length 27.7

9
Shikishi (poetry paper) album with poems celebrating Prince Takamatsu's coming of age
1936
ink on paper
area of calligraphy each 21.1×18.0

10
Grand Cordon of the Supreme Order of the Chrysanthemum (worn by the Prince)
1925

11-1
Bonbonnière, round shape with scattered *ume* (Japanese apricot) blossom patterns
1925
silver
d. 6.4, h.2.6

11-2
Bonbonnière, box shape with scattered *ume* blossom patterns
1925
silver
5.2×3.9×2.0

Imperial wedding and travelling abroad

12
Robe décolletée (Costume worn for the First Audience Ceremony)
1930
ivory white textile, bead decorations
shoulder w.34.0, total l. 177.0

13
First Order of the Precious Crown (worn by the Princess)
1930

14
Furisode with design of various chrysanthemums on black ground
c.1930
chirimen crepe ground, *yuzen* dyeing, embroidery
l. of back center to sleeve end 62.5, body l. 160.7

15-1
Bonbonnière, *suhama* (sandbar) shape with pine and wave design
1930
silver
3.95×6.2×1.8

15-2
Bonbonnière, covered box shape
1930
silver
6.45×6.25×3.9

16
Shikishi (poetry paper) album with poems celebrating Prince Takamatsu's wedding
1937
ink on paper
area of calligraphy each 21.1×18.0

17
Medal commemorating the Imperial wedding The Ministry of Finance Mint Bureau
1930
cast *hakudo* (copper alloy)
d. 6.0

18
Paperweight in shape of a skier
Asakura Fumio
1930
cast *hakudo* (copper alloy)
10.5×45.0×16.0

19
Furisode with field poppy designs on grayish blue ground
c.1930
chirimen crepe ground, *yuzen* dyeing, embroidery
l. of back center to sleeve end 64.0, body l. 162.8

20
Furisode with designs of peonies and folding cypress fans on purple ground
c.1930
chirimen crepe ground, *yuzen* dyeing, embroidery
l. of back center to sleeve end 63.0, body l. 160.0

21
Furisode with design of *ume* blossoms and pigeons on black ground
c.1930
chirimen crepe ground, *yuzen* dyeing, embroidery
l. of back center to sleeve end 62.5, body l. 160.2

22
Folding fan with chrysanthemum designs in *makie* on ivory
early 20th c.
makie on ivory
bone length 26.0

23
Folding fan with pine and crane design
c.1930
makie on ivory, color on silk
bone length 24.5

24
Ivory vanity set for traveling
20th c.
ivory, glass
brush (large one) 14.5×8.5×5.0 etc.

Items succeeded from Late Prince and Princess Takamatsu

March 26 (Tue.) — July 15 (Mon.), 2013

Foreword

The Late Prince Takamatsu Family was established in 1913. Prince Nobuhito of Takamatsu was born as the third son of the Crown Prince Yoshihito (Emperor Taisho) on January 3rd, 1905. The Late Prince Arisugawa family ceased because Prince Takehito of Arisugawa passed away on July 6th, 1913, and therefore, Prince Nobuhito received the Imperial family title Takamatsu from Emperor Taisho in order to succeed the Late Prince Arisugawa family rites, and became the head of the family at the young age of 8 years old. After studying at Gakushuin and the Naval Academy, the Prince married Tokugawa Kikuko on February 4th, 1930. The same year, he made an official trip to Great Britain and Spain in place of Emperor Showa, and travelled various European countries and the United States for over a year, for international goodwill. After he returned to Japan, during a time of unprecedented hardships, he spent busy days as a navy officer being sent to various areas in the country.

After the war, Prince Nobuhito became honorary presidents of various organizations of various fields such as international goodwill, welfare, arts and crafts, and sports, and attended commemorative ceremonies and tournaments along with the Princess, encouraging those engaged and warmly watched over the development of each field. Prince Nobuhito passed away on February 3rd, 1987 at age 82, after which the Princess became the head of the family. She contributed to the promotion of art and culture and expansion of social welfare until she passed away on December 18th, 2004 at age 92.

In this exhibition, we will introduce the deep relationship between Prince and Princess Takamatsu and art, through the various superior items succeeded from Emperor Taisho, Empress Teimei, and the Late Prince Arisugawa family, along with the items deeply related to Prince and Princess Takamatsu, among those donated to our museum.

March, 2013

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan